

## 第2章 京都大学北部構内 BF34 区の発掘調査

千葉 豊

### 1 調査の概要

本調査区は、京都大学北部構内の中央やや東よりにあたり、北白川扇状地の西端に位置する（図版1-221）。ここに基礎物理学研究所研究棟の新営が計画されたため、これまでの調査成果を勘案し、新営予定地全域の発掘調査をおこなった。発掘調査は、1994年3月1日に開始し、6月24日に終了した。調査面積は、1228m<sup>2</sup>。

本調査区周辺ではこれまでの調査で、縄文時代の遺跡として、中期の竪穴住居跡（123地点）、後期の甕棺墓と配石墓（11地点）を検出し、また北白川扇状地の扇端に形成された低湿地を発掘し、晩期を中心とする自然環境の復原を試みている（56・135地点）。さらに歴史時代の遺跡として、平安後期～鎌倉初頭の瓦溜め（8地点）、鎌倉時代の火葬塚（54地点）、平安～江戸後期の水田跡（125・180地点）などがみつかり、縄文時代から江戸時代にいたる遺跡の広がり土地利用の変遷が問題となる場所であった。

調査の結果、中世から近世の道路や耕作にともなう溝群、中世の砂取穴、古代の溝・土坑・土器溜等を検出し、縄文時代から江戸時代にいたる整理箱80箱の遺物を得ることができた。これらは、この地における土地利用の変遷を明らかにするための基礎資料となるほか、平安時代の遺構と遺物については、文献にみえる貴族の別業あるいは古代寺院との関連が考えられ、鴨東の古代を明らかにするうえで、重要な資料となろう。

なお発掘調査および整理調査は、千葉豊と吉田広が担当し、磯谷敦子、矢野由記子、柴垣理恵子、富井眞、安見昌幸、永谷隆夫が測量・実測などの作業にあたった。

### 2 層 位

本調査区東半は、地表面の標高約66mをはかり、ほぼ平坦であるが、Y=2730付近を境に西へ緩やかに傾斜し始め、調査区西端では標高約65.2mをはかる。現地形に見られるこうした傾斜は、以前この位置に南北方向にはしる道路SF1が設けられ、この道路をはさんで東西両側に段差が作られたことに起因している。

調査区の基本層位は、上から表土（第1層）、灰色土（第4・第6層）、赤褐色土（第5・第7層）、茶褐色砂質土（第8層）、黄色砂（第9層）、黒色土（第10層）、黒褐色土（第11

京都大学北部構内BF34区の発掘調査

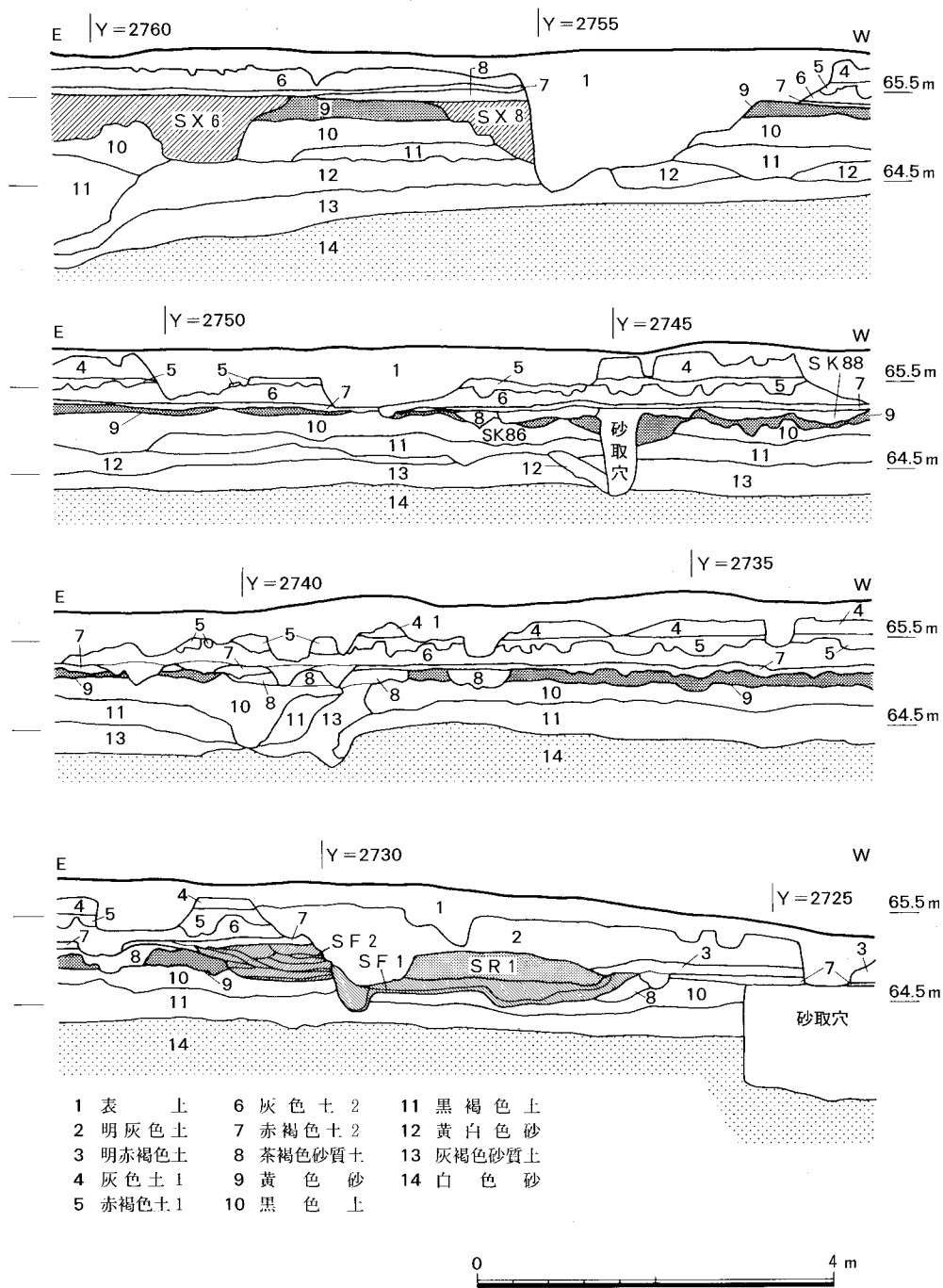


図1 調査区南壁の層位 縮尺1/80

## 層 位

層)である。これ以下は水の影響を受けて堆積した土層で、黄白色砂(第12層)、灰褐色砂質土(第13層)、白色砂(第14層)と続く。明灰色土(第2層)と明赤褐色土(第3層)は、Y=2730付近から西にのみ分布する。近代の耕作土とその床土である。

灰色土は、16~17世紀ごろの耕作土で2枚確認され(灰色色土1・2)、床土層である堅くしまった土層(赤褐色土1・2)をそれぞれともなっている。調査区東辺には、灰色土1・赤褐色土1がみとめられないけれども、これはY=2753付近に西から東へ落ちる段差があり、棚田が形成されていて後世に削平を受けたためと考えられる。茶褐色砂質土は東に厚く、西へゆくに従ってうすくなり、ほぼY=2743以西ではみとめられなくなる。古代から中世の遺物を含む。

黄色砂は、弥生前期末~中期初頭の土石流にともなう堆積物であることが従来の調査で明らかになっており、吉田山北麓から西麓にかけて広く分布する鍵層である。本調査区では、層厚0.2~0.3mほどで堆積のみとめられない部分もある。調査区周辺の状況と比較すると薄い堆積であり、本調査区付近が当時、扇状地の尾根部であったことを裏付ける〔泉78〕。黒色土は、縄文時代の遺物を含む。黄色砂ないし黒色土上面で、古代~中世の遺構を検出した。

灰褐色砂質土からは、1点ではあるけれども縄文早期の押型文土器が出土し、この土層の堆積年代を知る手がかりを得ることができた。調査区南壁付近、Y=2740、2760の2ヶ所で、黒色土以下の堆積土の落ち込みや乱れがみとめられた。樹木の根の痕跡(風倒木痕)と理解する。白色砂は、中世に砂取りの対象となった堆積土で、この地一帯の基盤を形成していると考えられる。

### 3 遺 構

本調査区でみつかった遺構には、溝、土坑、道路などがあり、土地利用の変遷にともなって、異なる性格の遺構が残されてきた。大きく、古代、中世前半、中世後半~近世前半に分けて説明しよう。

古代の遺構(図版3、図2・3) 古代の遺構には、土坑、溝、土器溜などがある。これらは、遺構内より出土した遺物の下限にもとづいて、平安前期と平安中期の2期に大別できる。

平安前期の遺構は、前葉(8世紀末~9世紀前半)と後葉(9世紀後半~10世紀前葉)に細分できる。前葉の遺構は、土坑SX6、SX8、土器溜SX1である。調査区東南辺のみ

つかったSX6とSX8は、南北に長い土坑で並行しており、調査区外へと続いている。SX6は幅3m、検出面からの深さ0.9m、SX8は幅2.5m、検出面からの深さ0.5mをはかる。SX6・SX8からは、土師器・黒色土器・須恵器・瓦類・炭化材などがまとまって出土した。土器溜SX1は、長辺1.1m、短辺0.4mの楕円形の範囲に遺物が集中する。明瞭な掘り形をもたない。

前期後葉の遺構は、溝SD45・SD46、土坑SX7、土器溜SX3である。SD45は幅0.7～1m、SD46は幅0.9mで、両溝は約3mの間隔をあけて東西方向に並行してはしる。方位を真北から約6度東へ振る。SD45は長さ28mをはかり、西端はSF1によって破壊されているが、南北方向に続く溝に接続していた可能性がある。この西端に近い部分で、一括廃棄されたと思われる多量の土器・陶磁器を得た。土坑SX7は近代の攪乱で破壊されており、一部を確認したにとどまった。土器溜SX3は、明瞭な掘り形をもたず、長辺1m、短辺0.6mほどの平面楕円形の狭い範囲に遺物が集中する。

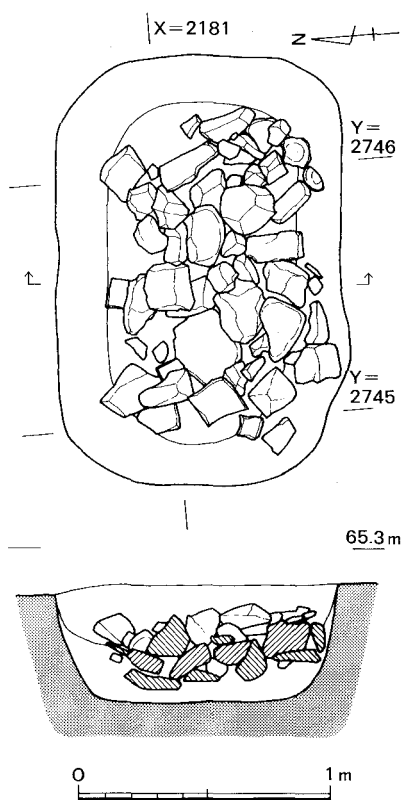


図2 土坑SK83 縮尺1/30

出土遺物から判断して、SD45・SD46は9世紀末には埋没しており、SX7・SX3はやや新しく10世紀前葉の年代を与えられる。

平安中期（11世紀）の遺構は、土坑SK83、SK86、SK87、SK88、SK95で、SK95を除いて、調査区中央南辺に集中する。SK83は、このなかでもっとも残りのよい土坑で、長辺1.8m、短辺1.1mをはかり平面隅丸長方形を呈する（図2）。埋土に人頭大の礫を充填する。検出面からの深さ0.5mをはかる。11世紀中葉の多量の土師器と瓦類が出土しており、集中する他の土坑もほぼ同時期と考える。SK95は南北に細長い土坑で、長さ4m、幅1.2mをはかる。11世紀前葉の遺物が少量出土した。

中世前半の遺構（図版3、図3） 中世前半の遺構は、白色砂の採取を目的として掘削された大規模な不定形土坑である。調査区のほぼ中央と調査区西端の2ヶ所で確認できたので、

遺 構

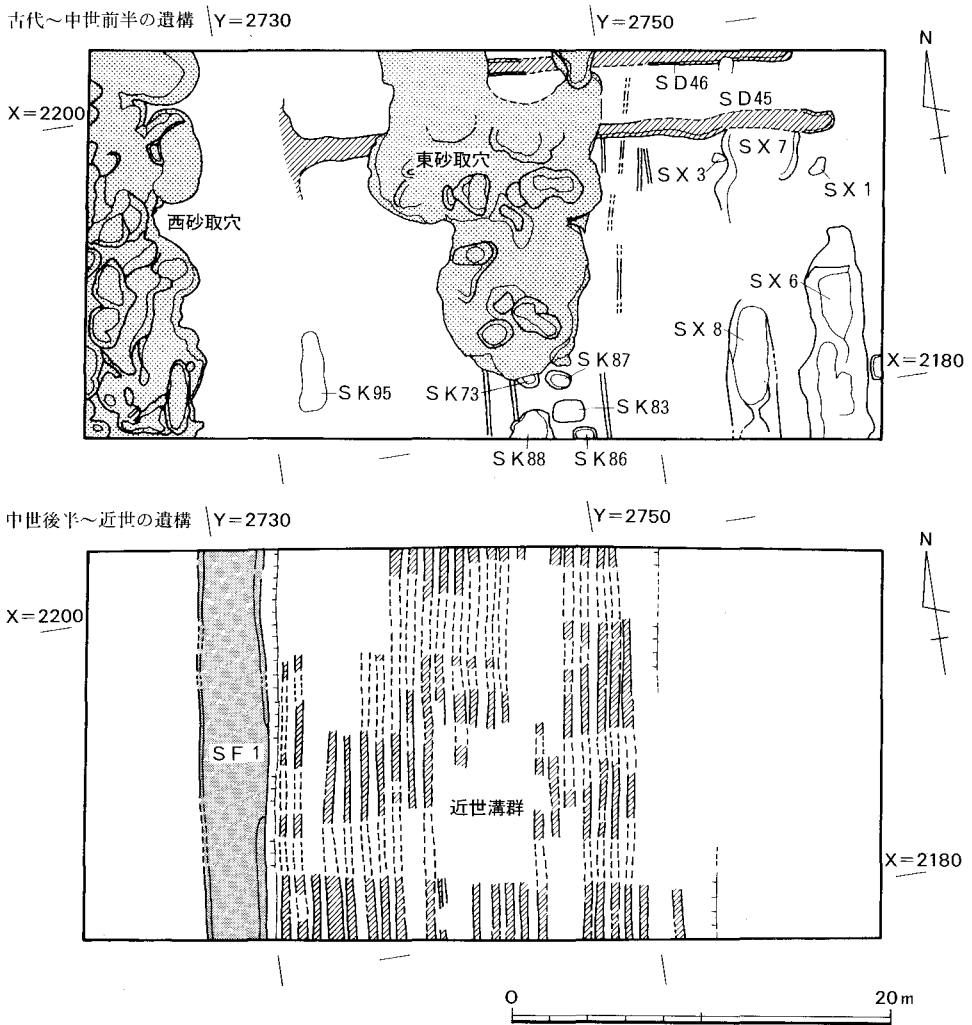


図3 調査区検出の遺構 縮尺1/400

便宜的に、東砂取穴、西砂取穴と呼んでおく。両砂取穴とも調査区外へと続いており、規模は不明である。白色砂を掘り込み、砂礫に達すると掘削をやめている。東西砂取穴の間は、後世に道路SF1・2が造成されており、この時期の遺構は検出できなかったが、砂取穴がこの部分に及んでいないことは注目しうる。道路SF1・2は、字境の役割も担っていたと考えられ、すでに中世前半の段階でこの付近が土地境界の役割をもっていたことを推測させるからである。

両砂取穴の埋土からは、多量の古代の遺物とともに中世前半（13世紀）の遺物が少量出

土しており、砂の採取はこの時期におこなわれたと理解する。なお、調査区南壁でも、南側へ広がるとみられる砂取穴の断面が確認されており、この地一帯が砂取りの対象になっていたと想定できる。

中世後半～近世前半の遺構（図版2，図3） 道路SF1・SF2および溝群がこの時期にあたる。道路SF1・SF2は、調査区西辺を南北方向にのびる。方位を真北から約9度東へ振る。道路SF2は、SF1の造成によってほとんどが破壊されており、東側の端部を検出したにとどまった。砂質土をつき固めた4～5枚の路面が確認でき、長期に及ぶ利用が想定できる。

道路SF1は、逆台形に地面を掘削し、幅約4mの路面を造成している。2枚の路面が確認でき、最初は掘削面を叩きしめ、次の段階で砂礫を敷きつめた一種の舗装をおこなっている。最初の段階では、東側に側溝を設けている。路面を覆うように、流路SR1が堆積しており、洪水により道路としての機能が維持できなくなったことを考えさせる。

灰色土2上面で、赤褐色土1を埋土とし南北方向にはしる25本の溝を検出した。幅0.3～0.4mで等間隔に並び、道路SF1同様、方位を真北から約9度東へ振る。耕作にともなう畝溝であろう。

これらの遺構の年代については、SF2は赤褐色土2に覆われており、それ以前である。一方、SF2をきって造成しているSF1は、堆積の状況から見て、灰色土2・赤褐色土2と同時期か、それ以降である。道路SF1・SF2や灰色土、赤褐色土から出土した遺物は多くないが、出土遺物の下限の年代から判断して、SF2は14世紀後半にさかのぼり、SF1は16世紀以降、灰色土2上面で検出した溝群は17世紀の遺構と考えられる。

#### 4 出土遺物

縄文時代から江戸時代にいたる遺物が整理箱80箱分出土した。ここでは、縄文時代の遺物と出土遺物の主体を占める古代の遺物について詳述する。

##### (1) 縄文時代の遺物（図版4，図4～6）

縄文土器416点、石器2点が出土した。これらは、縄文時代に堆積した土層である灰褐色砂質土（1点）および黒色土（225点）から出土したものと、上層の歴史時代の堆積土に混在して出土したもの（192点）に分けられるが、両者を一括して時期別に分類して記述する。本文中で、層位をとくに記したものの以外は、上層の歴史時代の堆積土出土である。

I1～I6は、早期の押型文土器。I1～I4は、舟形沈文を密接に加えている。I5

出土遺物

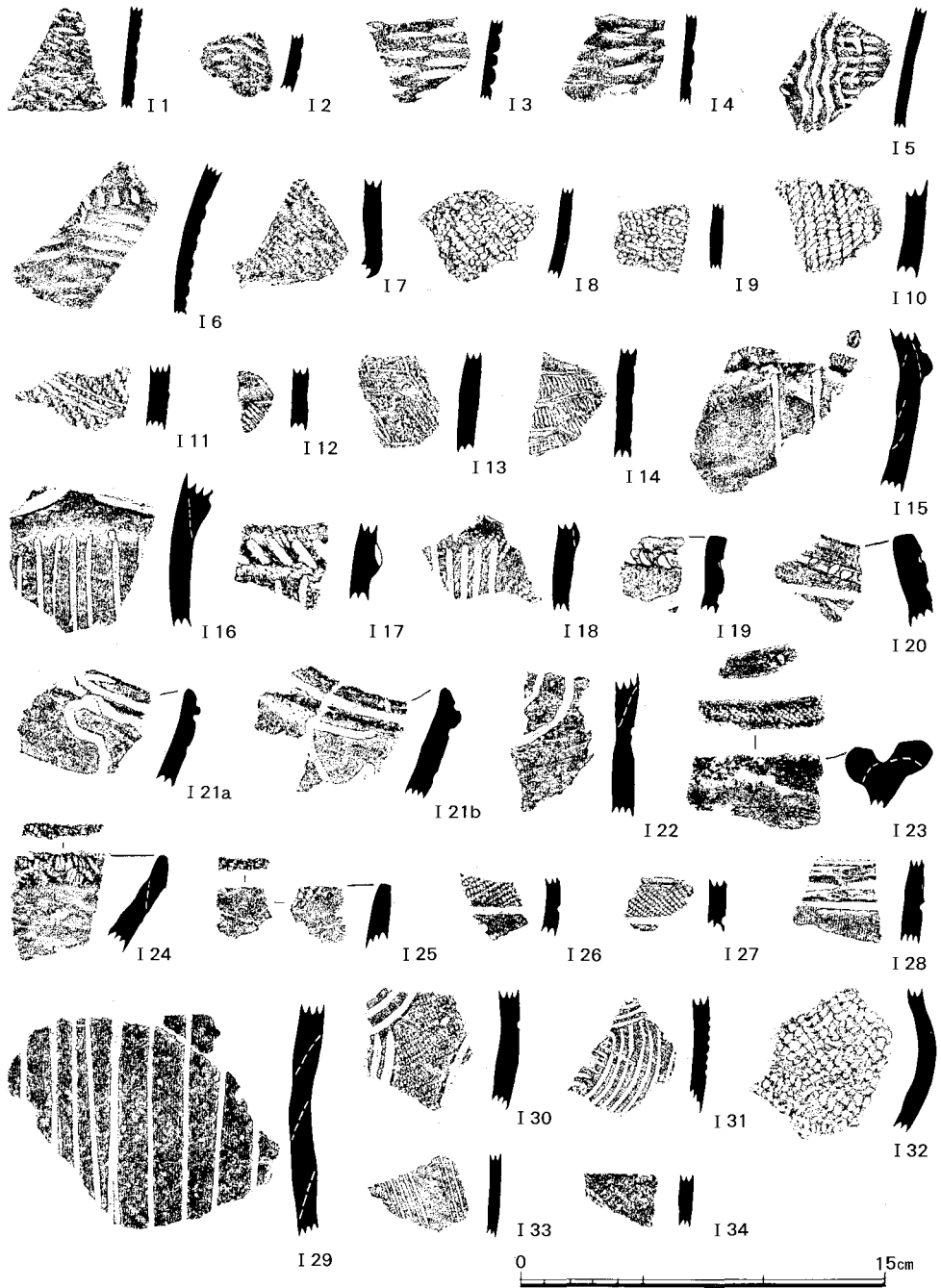


図4 縄文土器(I) (I 1 ~ I 6 早期, I 7 ~ I 9 前期, I 10 ~ I 22 中期, I 23 ~ I 34 後期) 縮尺1/3

・ I 6 は舟形沈文と山形文を組み合わせて施文している。I 5 は、山形文を帯状に縦位に施文した後、舟形沈文を加えている。これらは大川式から神宮寺式にかけての時期のものであろう。I 3 は灰褐色砂質土、I 4 は黒色土出土。

I 7～I 9 は、前期の土器。いずれも 2 段右撚で、4～5 mm と器壁が薄いという特徴をもつ。I 7 は黒色土出土。

I 10～I 22 は、中期の土器。I 10 は、船元 I～II 式に特有の固い繊維による 2 段右撚の縄文を施す。I 11 は、縄文地に半截竹管で弧状の沈線文を描く船元 III 式。I 12～I 14 は、撚糸文（棒卷縄文）を地文とする里木 II 式。I 14 は、篋状施文具で弧状の沈線を加えている。I 15～I 22 は、中期末の北白川 C 式。I 15～I 18 は、いずれも肥厚ないしは隆帯で区画された口縁部を欠失する。I 19・I 20 は、最上部の沈線内に押し引き状の刺突を加えている。I 21 a と I 21 b は同一個体で、山形の波状口縁を呈する。肥厚する口縁部に一条の沈線をめぐらし、頸部には蛇行沈線を垂下させている。I 22 は深鉢の胴部資料。I 10～I 14・I 17～I 20・I 22 は、黒色土出土。

I 23～I 42 は、後期の土器。I 23 は、口縁部が内外に肥厚し、口縁外側端部に 2 段右撚縄文を施す。I 24 は、わずかに肥厚する口縁部に 2 段右撚縄文を加える。I 25 は、口縁上面と内面に 2 段左撚縄文を施している。I 26・I 27 は沈線間に縄文を充填して、帯縄文を作る。I 26 は 2 段左撚、I 27 は 2 段右撚縄文である。I 28 は、2 沈線間に短沈線を連続させる。I 29 は、多条の沈線文が垂下する。中期末の胴部の可能性も残る。I 30 は縄文地、I 31 は素文地に多条沈線で弧線文を描く。I 32 は胴部に 2 段右撚縄文を施す。I 33 は楯状施文具による条線文を垂下させる。I 34 は 2 段左撚の結節縄文を横位にめぐらす。I 23 は、後期前葉の縁帯文土器成立期、I 24～I 33 は北白川上層式 1 期～2 期、I 34 は北白川上層式 3 期～一乗寺 K 式に位置付けられよう。I 35～I 42 は、後期前半を中心とする無文土器であらう。I 35 は、口縁上面に刻みをもつ。I 42 はゆるやかな波状口縁を呈する。I 23～I 27・I 29～I 32・I 38・I 39・I 41 は、黒色土出土。

I 43～I 51 は、晩期末の突帯文土器。I 43～I 48 は口縁部資料で、いずれも面取りしない口縁端部に接するように突帯を貼り付けている。I 43 は、突帯をもう 1 条付加し、口縁部に 2 条の突帯をめぐらす珍しい例である。I 49～I 51 は、頸胴部の資料で、屈曲がほとんどみとめられない。突帯上には、I 46 を除いて刻みを施す。刻みの形状は、I 43・I 45 は D 字、I 44 は O 字で、残りは小 DV 字である。これらは、長原式であらう。

I 52～I 56 は、土器底部。I 53・I 54 は底部外面が中央に向かってわずかにくぼんでい



出土遺物

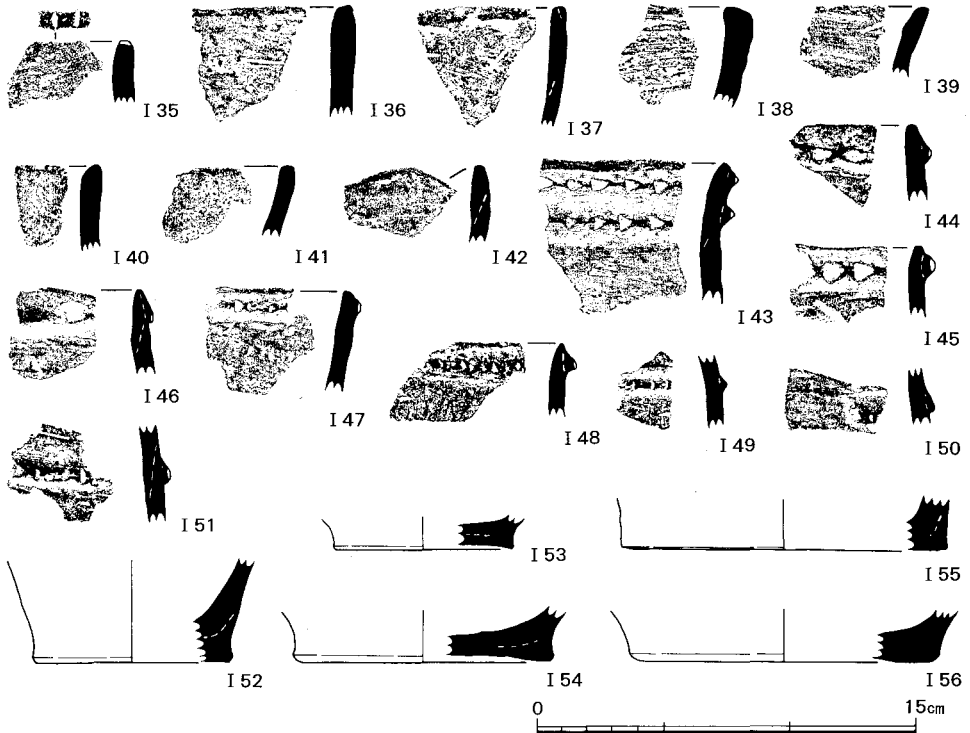


図5 縄文土器(2) (I 35~ I 42後期, I 43~ I 51晩期, I 52~ I 56底部) 縮尺1/3

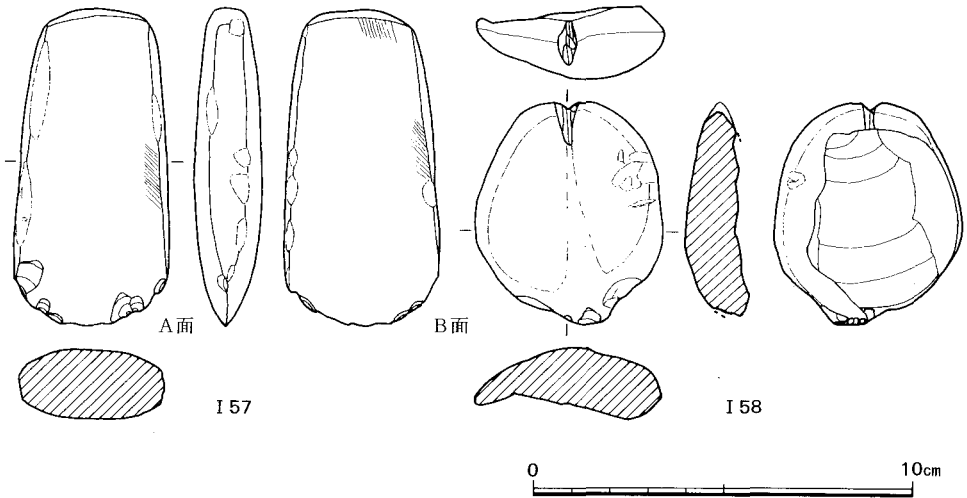


図6 石器 (I 57磨製石斧, I 58切目石錘) 縮尺1/2

る。後期前半を中心とする時期の底部である。

石器類は2点、いずれも黒色土から出土した。I 57は定角式磨製石斧で、丁寧な研磨によって仕上げられている。全長83.9mm、刃部幅40.7mmをはかる。A面側の刃部に、使用時の衝撃によって生じたとおもわれる剝離痕がみとめられるほか、刃縁には刃潰れ状の小剝離痕が観察できる。砂質片岩製で、重量122.2g。I 58は、切目石錘。全長59.6mm、最大幅48.8mmをはかる。片面のほぼ全面に及ぶ剝離が端部の一方にも及んでいるため、切目は1端部でのみ観察できる。切目は断面V字形で、両面にめぐっている。煌斑岩製で、重量60.1gである。

(2) 古代の遺物 (図版5～11, 図7～21)

整理箱50箱に及ぶ古代の遺物が出土している。平安時代各時期の遺物が出土しているが、主体を占めるのは、平安時代前期・中期で、これらは土坑や溝から出土した一括性の高いものが多い。

以下、遺物の記載にさいして、土器・陶磁器の基本的な分類は、平城宮〔奈文研76〕や京都大学構内遺跡〔京大埋文研81〕における分類を踏襲し、遺物の年代観については、『平安京提要』(1994年)および小森俊寛・上村憲章の編年〔小森・上村96〕を参考にした。また、比較的まとまった量の遺物が出土したSX8, SD45, SX7, SK83については、口縁部が1/12以上残存している資料をすべて選択し、口縁部計測法によって、種類別の個体数を算出した(表3, p.30)。

なお、瓦類は遺構や包含層から出土したものを一括して、別項をたてて説明したい。

**SX8 出土遺物 (I 59～I 81)** I 59～I 73は土師器食器類。I 59～I 62は皿A, I 63～I 68は椀A, I 69～I 71は杯A, I 72・I 73は杯Bである。I 59～I 61・I 63～I 65は篋削り(c手法), I 62・I 66～I 71は撫でや押さえ(e手法), I 72・I 73は磨きによって外面を仕上げている。I 74は土師器壺E。外面をまばらな磨きによって仕上げる。I 75～I 77は土師器甕。胴部外面にI 75・I 77は刷毛目, I 76は叩きの整形痕を残しており、内面は撫でおよび刷毛目調整で仕上げている。

I 78～I 81は須恵器。I 78は壺, I 79は杯の蓋である。いずれも、つまみが剝落した痕跡が残る。I 80は、細長く伸びた胴部と口頸部をもつ壺G。高さ18.8cmをはかる。底部に糸切りの痕跡を残す。I 81は甕。口頸部が「く」字形に折れ曲がる。

**SX1 出土遺物 (I 82～I 93)** I 82～I 92は土師器食器類。I 82～I 86は皿A, I 87～I 92は椀A。外面の仕上げは, I 84～I 89・I 91はc手法, I 82・I 90はe手法である。

出土遺物

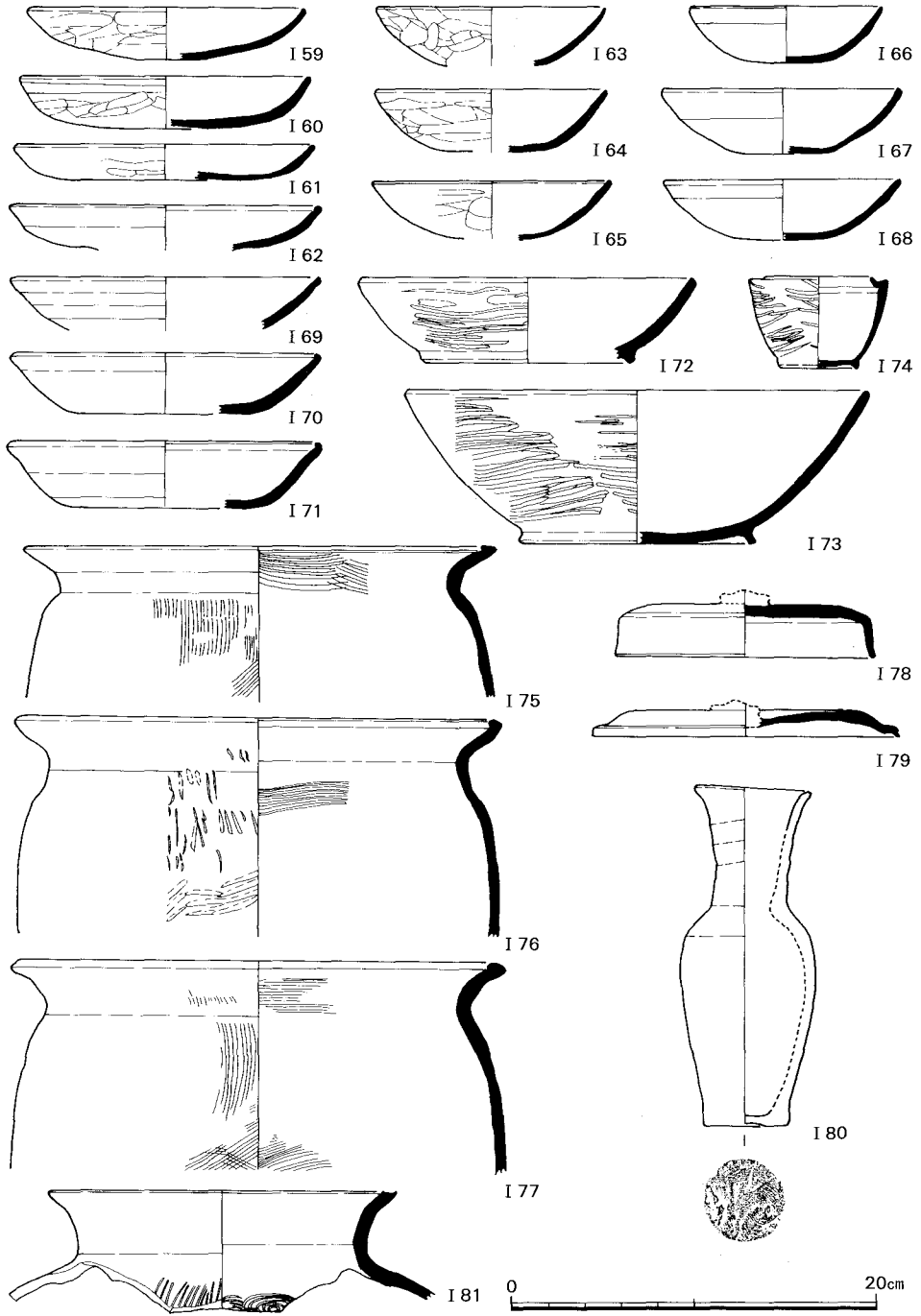


図7 SX8 出土遺物 (I 59~ I 77土師器, I 78~ I 81須恵器)

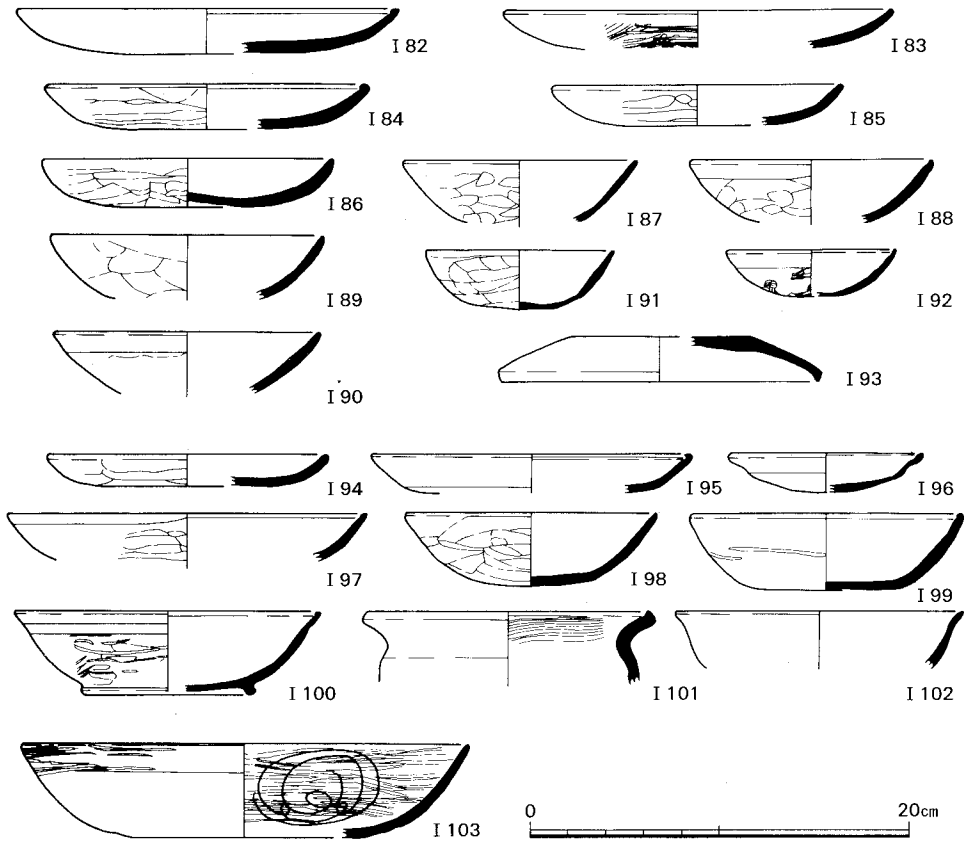


図8 SX1 出土遺物 (I 82~I 92土師器, I 93須恵器), SX6 出土遺物 (I 94~I 101土師器, I 102 灰釉陶器, I 103黒色土器)

I 83は削り後に磨き, I 92は疎らな磨きで仕上げる。I 93は須恵器杯蓋。つまみのつかないタイプと思われる。

**SX6 出土遺物 (I 94~I 103)** I 94~I 100は土師器食器類。I 94・I 95は皿A, I 96~I 98は椀A, I 99は杯A, I 100は杯Bである。外面の仕上げは, I 94・I 97・I 98がc手法, I 95・I 96がe手法, I 100が磨きであり, I 99は横撫でのち, きわめて粗い磨きで仕上げている。

I 101は小型の土師器甕。口縁部内面に横方向, 胴部外面に縦方向の刷毛目調整を施す。I 102は灰釉陶器椀。口縁部がわずかに外反する。I 103は黒色土器杯。内面を黒色処理するA類である。内面は横方向の密な篋磨き, 外面は粗い篋磨きで仕上げている。内面に螺旋状の暗文を施している。

SX8・SX1・SX6 から出土した遺物は, 土師器の小型食器類の外面を削りで仕上げるも

出土遺物

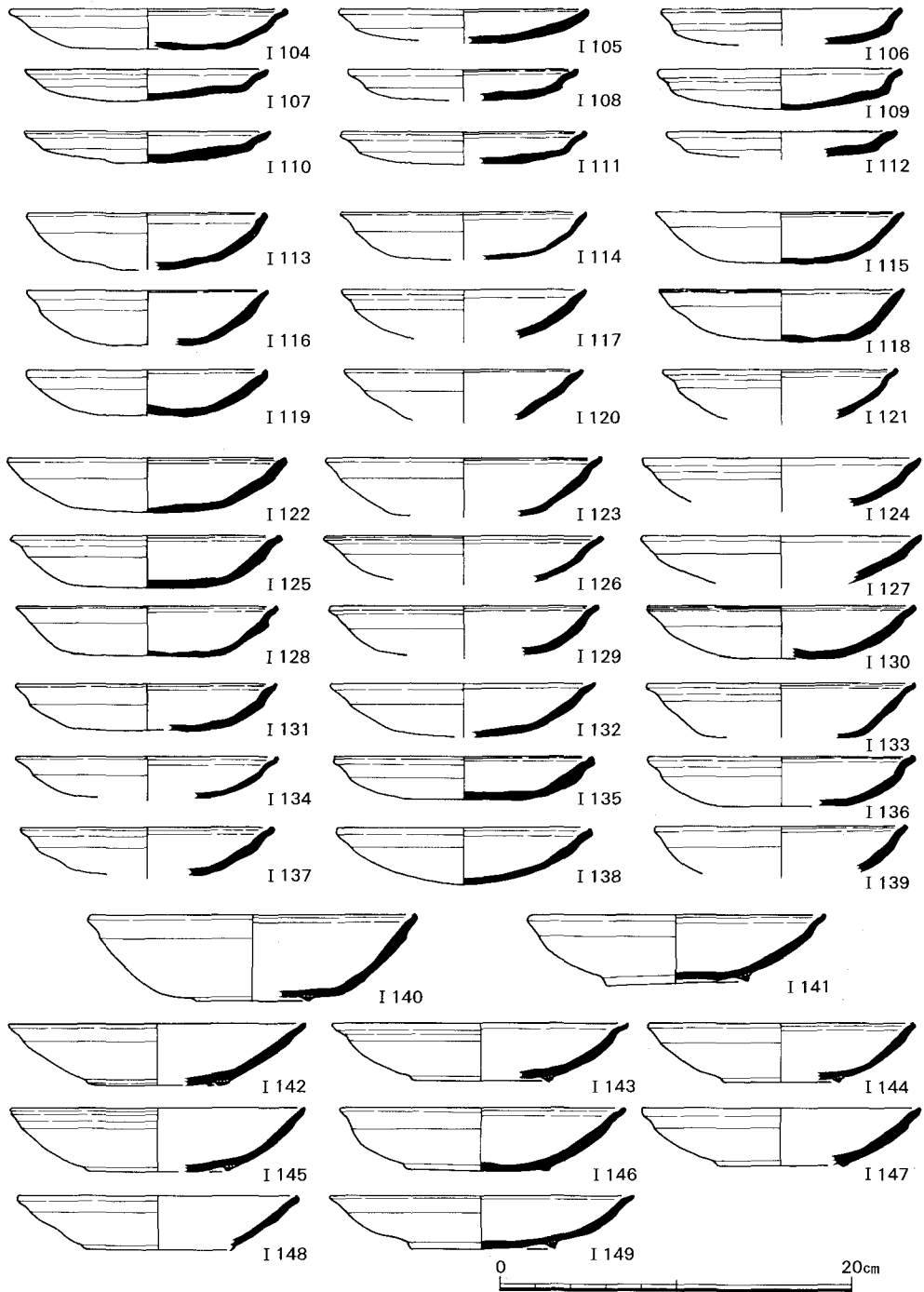
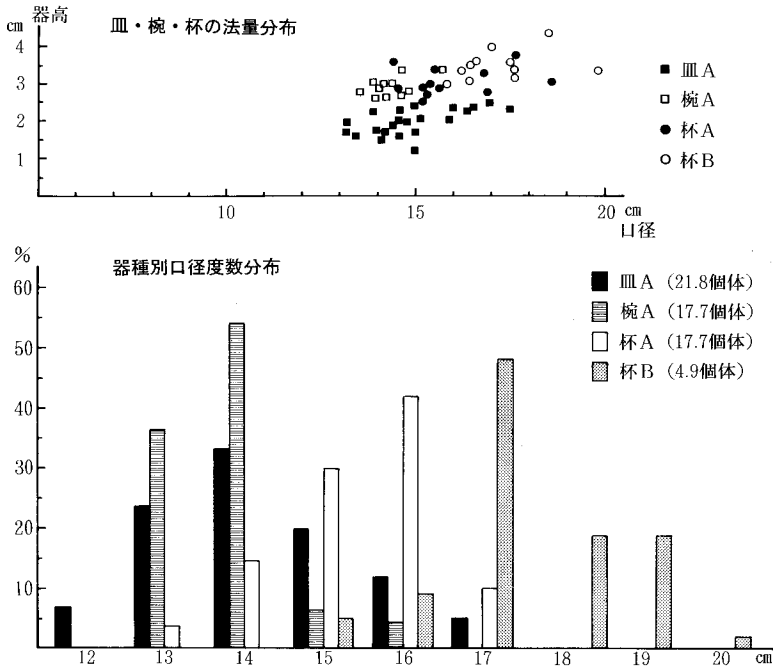


図9 SD45 出土遺物(1) (I 104~ I 149土師器)

表1 SD45 出土土師器皿・椀・杯の計測結果



のが主体を占めるなど、類似した特徴をもっている。いずれも9世紀前半代に編年することができよう。

**SD45 出土遺物 (I 104～I 249)** I 104～I 249は、SD45の西端で、幅1m、長さ1.5m前後の狭い範囲から集中して見つかった遺物である。炭化材なども含んでおり、不要になった器物が一括廃棄されたものと思われる。I 104～I 156は土師器食器類。I 104～I 112は皿A、I 113～I 121は椀A、I 122～I 139は杯A、I 140～I 149は杯Bである。いずれもe手法で仕上げられており、I 113・I 114・I 118・I 123・I 128・I 131・I 141・I 143・I 146・I 149のように、見込みに刷毛目調整の痕跡を残すものも多い。

表1上段は、皿・椀・杯の口径と器高の相関を、下段は各種類の口径別の度数分布をみたグラフである。皿Aは口径12～17cm台のものがあ、14cm前後にピークが認められる。口径15cmまでのものは器高が1.5～2cm前後の間におさま、口径15cmを越えるものの器高は、2～2.5cmである。椀Aは口径14cm前後にピークが認められ、器高は3cm前後に集中する。杯Aは、口径13～17cm前後のものがあ、16cm前後にピークがある。器高は2.5～3.5cmの間にほぼおさまる。高台のつく杯Bは、口径17cm前後にピークがあ、杯Aより一回り大きいことがわかる。器高は、I 140のように4cmを越えるものも

出土遺物

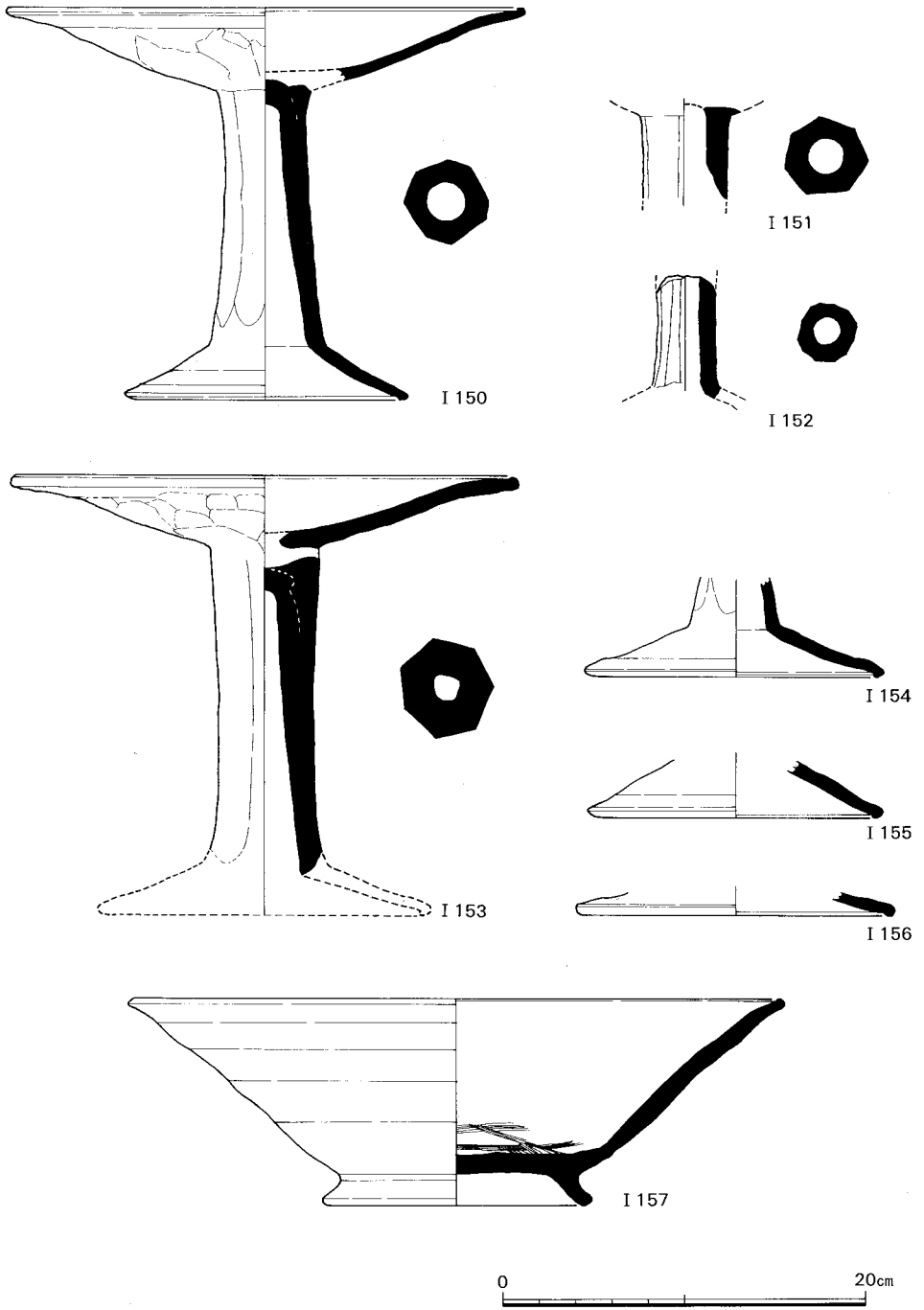


図10 SD45 出土遺物(2) (I 150~ I 157土師器)

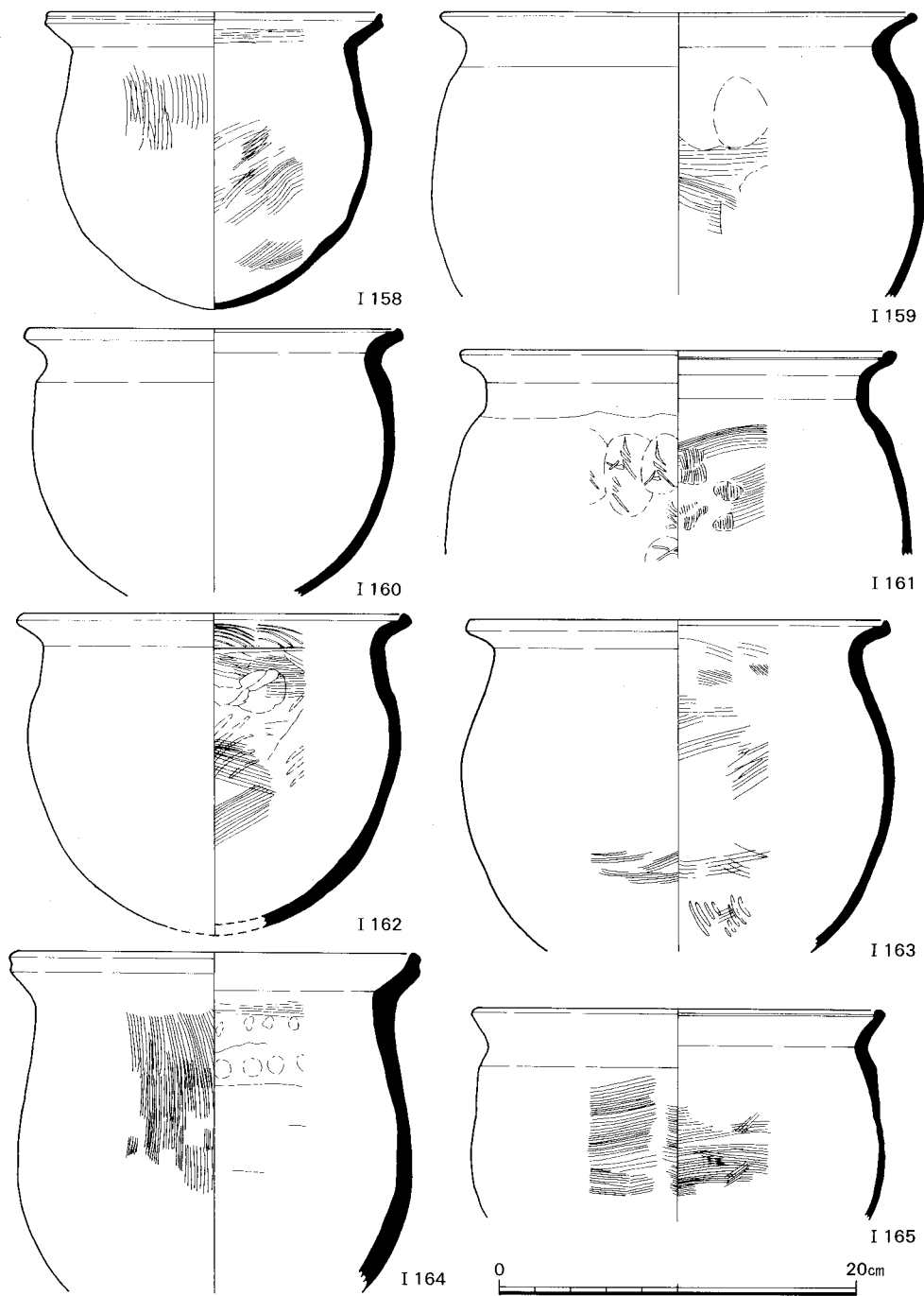


図11 SD45 出土遺物(3) (I 158~ I 165土師器)



出土遺物

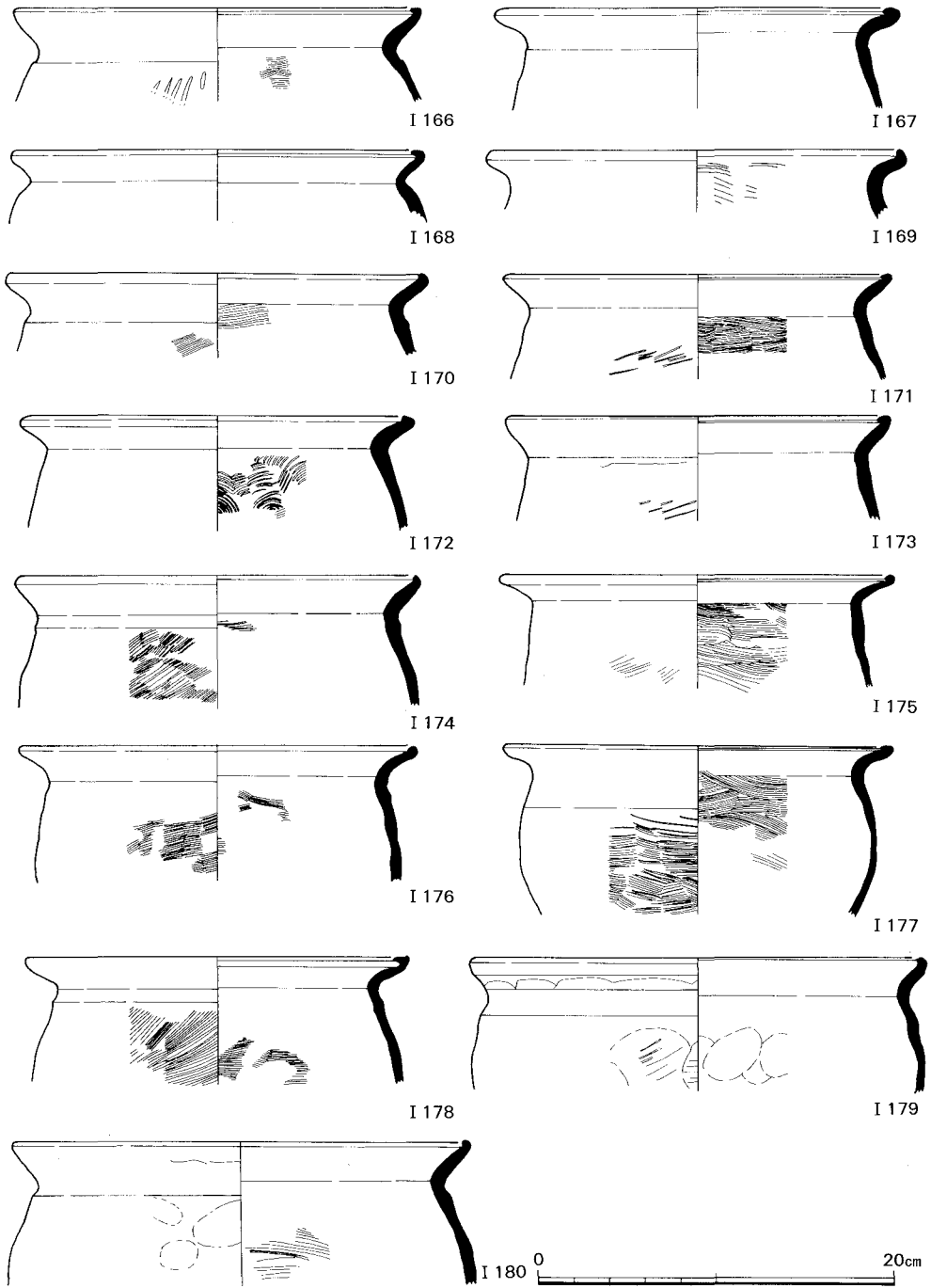


図12 SD45 出土遺物(4) (I 166~ I 180)

見られるが、ほとんどが3 cm 台である。

I 150～I 156は高杯。I 150は全形のわかる資料で、杯部の径ほぼ29cm、高さ22cm、台部の径約15cmをはかる。I 150・I 153とも、杯部外面には篋削りを施しているが、削りが浅く成形時の輪積痕が残る部分がある。脚部も篋削りによる調整で、面取りしている。台部は内外面とも、横撫でによって仕上げている。

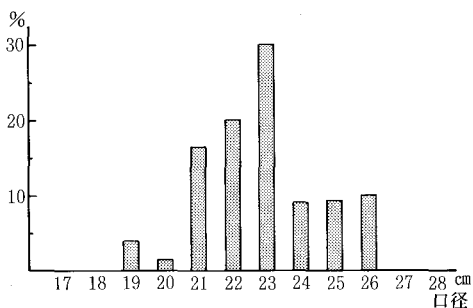
I 157は土師器の高台付き鉢。口径36cm 前後、高さ11.5cmをはかる。内面は刷毛目調整のち、撫でて仕上げしており、見込みに刷毛目痕が残る。外面は粗い撫でて、成形時の輪積みの痕跡が明瞭に残る。高台は外に踏ん張る形態で、内外面とも撫でて仕上げている。

I 158～I 180は土師器甕。口縁部から底部までわかる資料はほとんどないが、口頸部が「く」字形に折れ、胴部は球形を呈するものが多い。I 164のように比較的胴部が長く伸びる形態のものはこの例のみである。いずれも、口縁端部を内側ないしは上方へ折り曲げて成形している。内外面の仕上げ方を観察すると、叩き、刷毛目、撫で、粗い磨きといった技法が認められる。最終的な仕上げを刷毛目でおこなうものが多いが、刷毛目や粗い磨きを行なうまえの叩きの痕跡が残っている例があり、基本的にまず叩きによって整形したあと、刷毛目や撫で、粗い磨きを施して仕上げていることがわかる。

表2は、土師器甕のうち、口縁部が1/12以上残存している個体について、口縁部計測法によって、口径別の比率をみたものである。口径は19cm 前後から26cm 前後のものまで認められるが、21cm～23cm 前後のものが主体を占めている。

I 181～I 200は黒色土器。いずれも、内面のみを黒色処理するA類である。I 181～I 192は椀。断面三角形の高台がつくが、I 184は高台がつかない可能性が高い。内面は密接に磨いて仕上げ、外面はI 181～I 186のように磨きを施すものと、削りで仕上げているものがある。I 184は内面に朱が付着する。I 193～I 195は鉢。I 193は内面磨いて仕上げ、外面は劣化して調整不明である。I 194

表2 SD45出土土師器甕の口径度数分布



は内外面とも磨いて仕上げる。I 195は把手付き片口の鉢である。内外面とも丁寧に磨いて仕上げ、把手は面取りを施している。I 196～I 200は口頸部「く」字形の甕。内面は刷毛目調整で仕上げている。外面は、I 196が削りのみで仕上げているほかは、削りや指押さえの後、粗

出土遺物

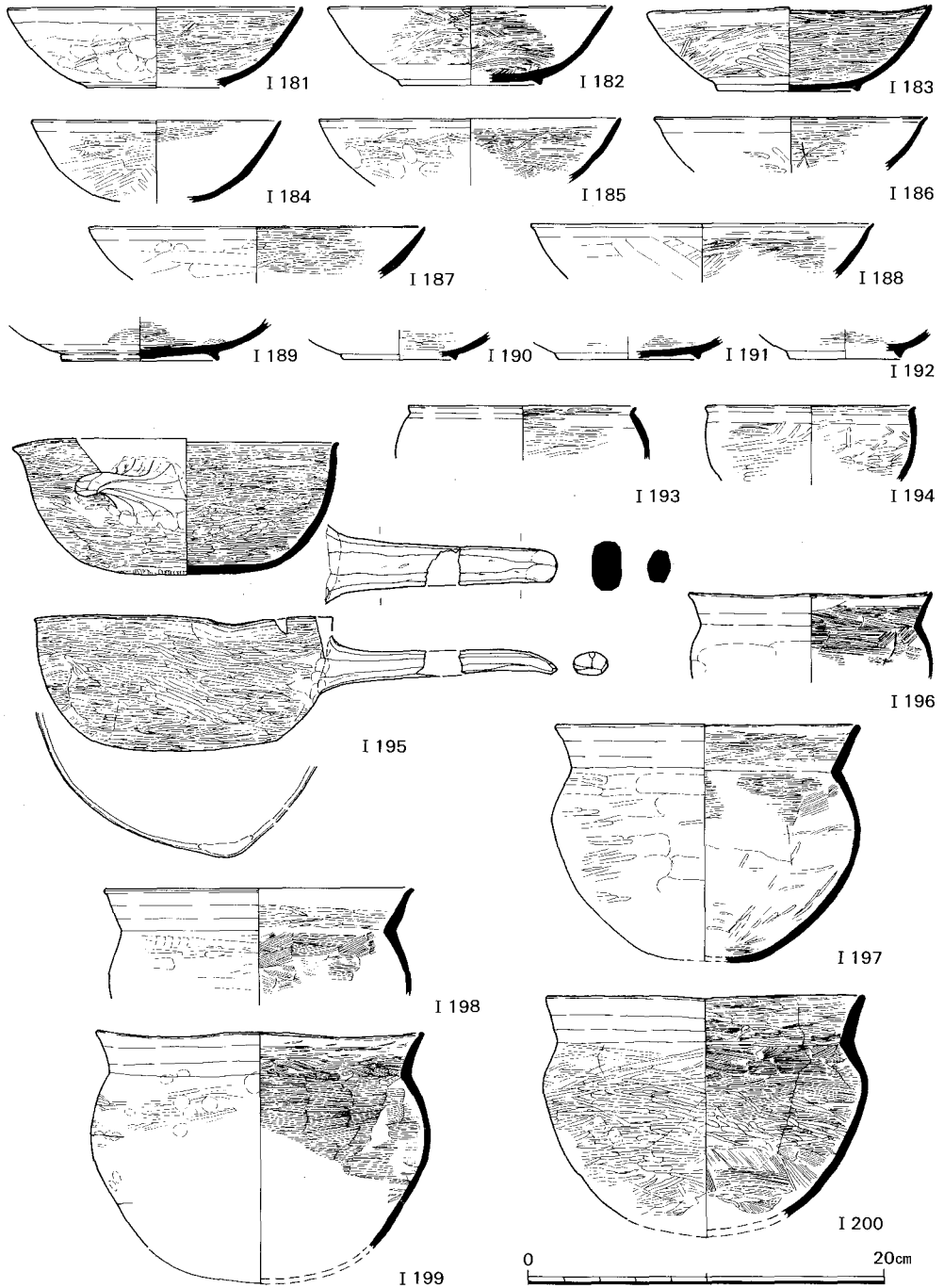


圖13 SD45 出土遺物(5) (I 181~ I 200黑色土器)

京都大学北部構内BF34区の発掘調査

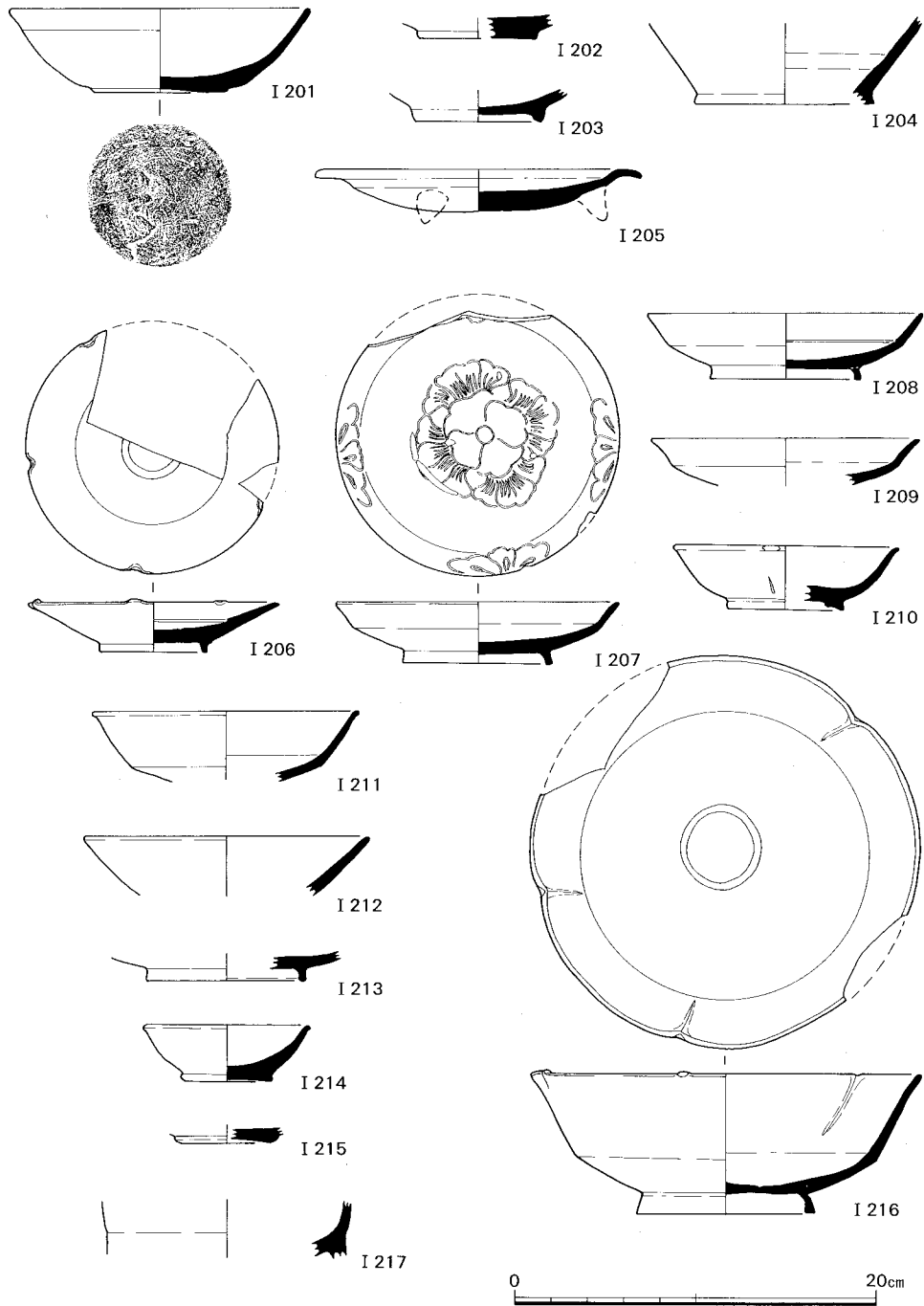


図14 SD45 出土遺物(6) (I 201~ I 205白色土器, I 206~ I 217緑釉陶器)

出土遺物

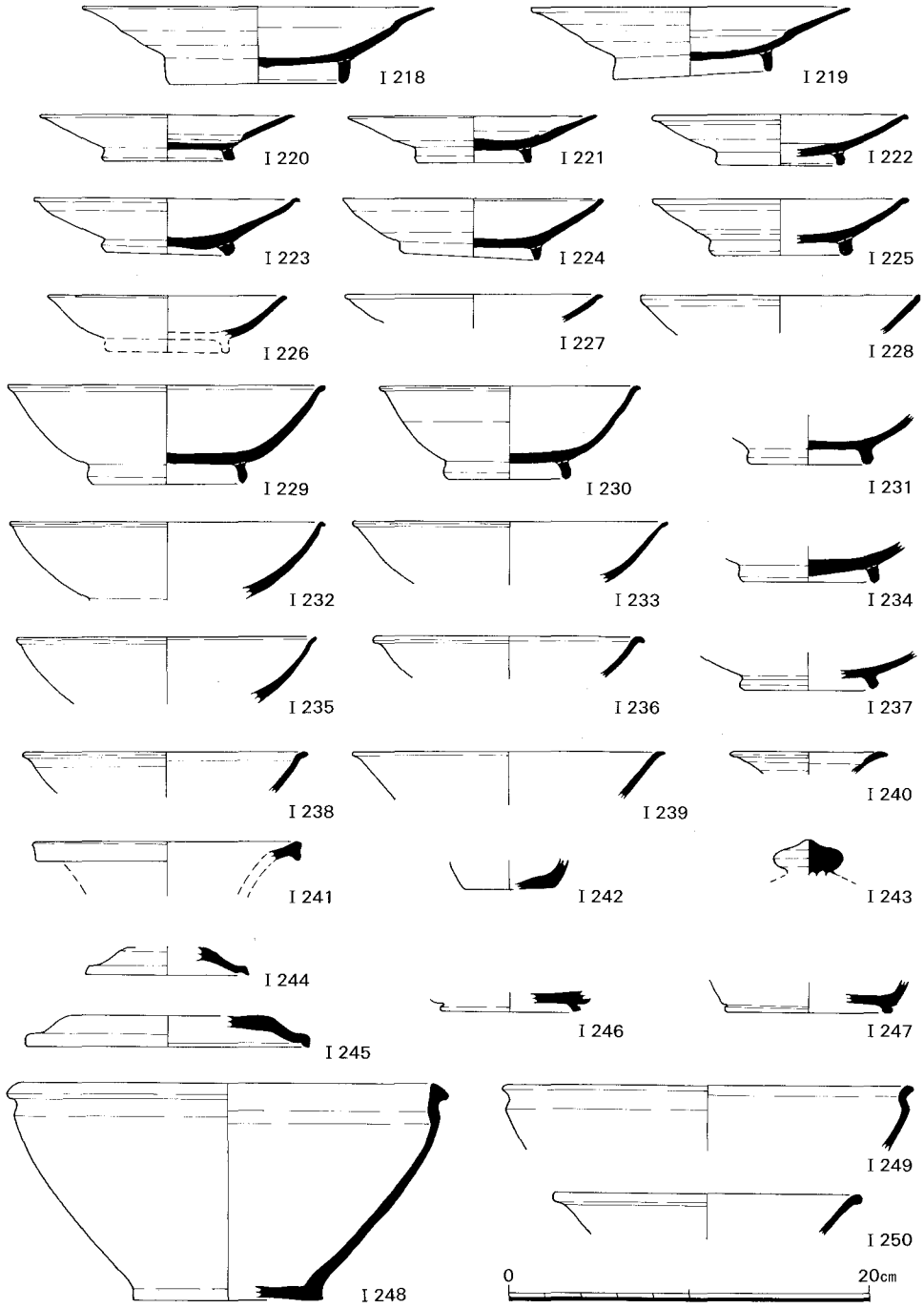


図15 SD45 出土遺物(7) (I 218~ I 243灰釉陶器, I 244~ I 249須恵器, I 250白磁)

い磨きを施している。口径は、I 196が14cm 前後、それ以外は18～19cm 前後である。

I 201～I 205は白色土器。I 201～I 203は椀。いずれも回転台を用いて成形している。I 204は壺形の形態を呈する。焼成不良の須恵器の可能性も残る。I 205は三足の盤。足の剥落痕が残っている。

I 206～I 217は緑釉陶器。I 206～I 216は椀・皿類である。体部中位で屈曲し稜をもつタイプ(I 207・I 208・I 209・I 211・I 216)、屈曲のないタイプ(I 210・I 212・I 214)、内面に段をもつタイプ(I 206)がある。I 206は、口縁端部を5ヶ所、内側へ押し輪花としている。I 210も口縁部を輪花状につくり、対応する胴部外面に篋描きで縦の沈線を加えている。I 207は内面に陰刻花文を施している。I 216は、大型の椀で口径約22cmをはかる。口縁部を輪花につくり、対応する内面に断面三角形の突帯を貼り付けている。I 214・I 215を除いて、いずれも焼成は硬質、貼り付け高台で、全面に施釉している。東海産の黒笹90号窯式のものである。I 214・I 215は焼成が軟質、削り出し高台で、I 214は底面に糸切りの痕跡が残る。これらは京都産であろう。I 217は香炉の底部付近の資料。焼成はやや軟質で、外面の釉はほとんど剥落している。

I 218～I 243は灰釉陶器。I 218～I 228は皿。I 218～I 220は内面に段がつく。I 229～I 239は椀。皿・椀の高台はやや内彎気味に立ち上がり、端部の尖る「三日月高台」のものが多く、I 240・I 241は壺の口縁部、I 242は壺の底部、I 243は壺の蓋のつまみである。これらの灰釉陶器は、丁寧な横撫で調整し、釉は刷毛塗りされている。I 220のみ横撫での後、磨いて仕上げ施釉もなされていないことから、本来は緑釉陶器の素地として焼成されたものと思われる。これらの灰釉陶器は緑釉陶器と同様、黒笹90号窯式に比定できる。

I 244～I 249は須恵器。I 244・I 245は蓋、I 246・I 247は高台のつく杯である。I 248・I 249は鉢。I 248は口縁端部が肥厚する。

I 250は白磁の椀。口縁部が小玉縁となる。邢窯系の製品であろう。SD45から出土した貿易陶磁はこれ1点のみである。

なお、SD45出土の土師器・黒色土器・灰釉陶器には、墨書のあるものが10数点確認できているが、いずれも判読には至っていない。

SD45出土資料は、土師器の小型食器の外面を撫でで仕上げるものが主体を占めており、黒笹90号窯式の緑釉陶器、灰釉陶器を伴うことから、9世紀後半代に位置付けることができると考える。

出土遺物

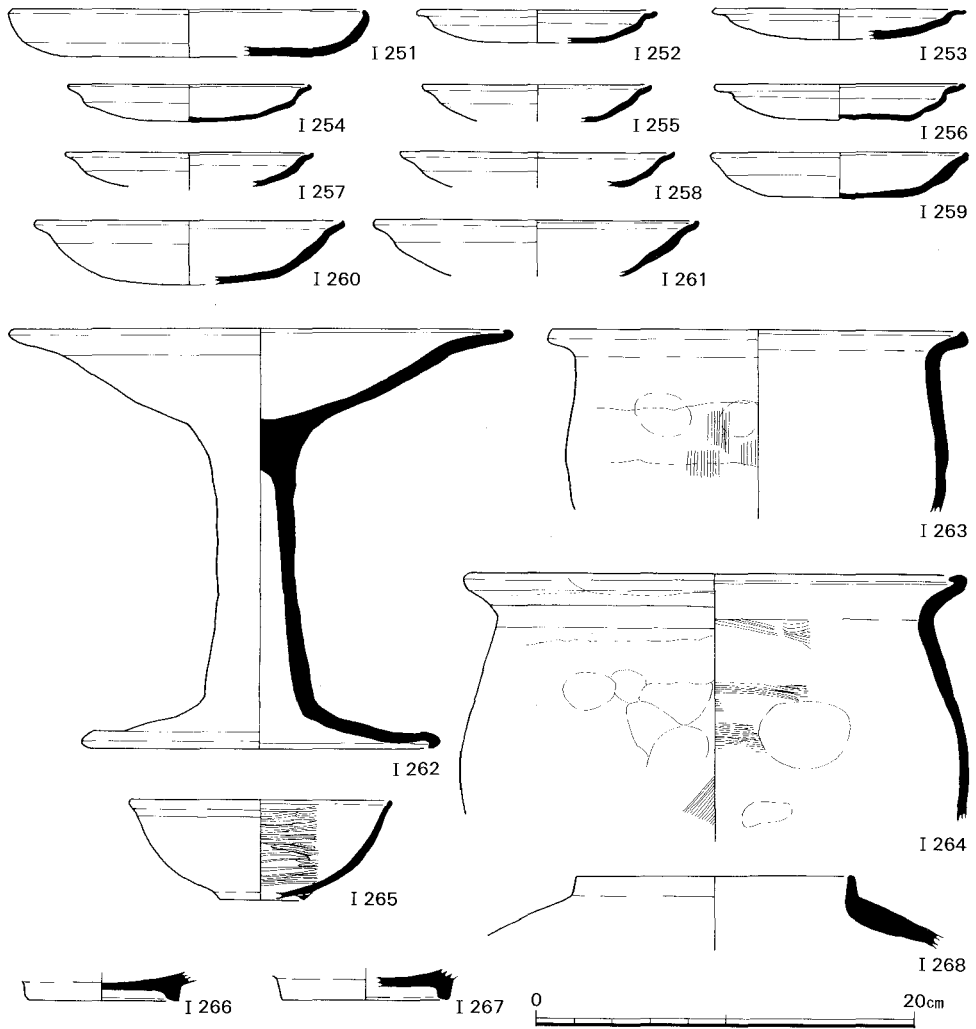


図16 SX7 出土遺物 (I 251～I 264土師器, I 265黒色土器, I 266・I 267白色土器, I 268灰釉陶器)

SX7 出土遺物 (I 251～I 268) I 251～I 262は土師器食器類。I 251～I 254は皿A, I 255～I 261は椀ないし杯Aである。I 251は口径19.1cmをはかり, 口縁部が内彎する。底部を削って整形しており, 本遺構出土遺物の中では古い様相をもっている。他の皿・椀・杯類は, いずれもe手法で仕上げられており, I 254・I 256・I 259は見込みに刷毛目調整の痕跡を残す。煤で黒変しているものが一定量あり, 灯明皿として使用されたのであろう。I 262は, 口径26.8cm, 高さ22.4cmをはかる高杯。外面は, 口縁端部のみ横撫でを施し, 他の部分は指押さえて仕上げている。I 263・I 264は土師器甕。口縁内外面を横撫でし,

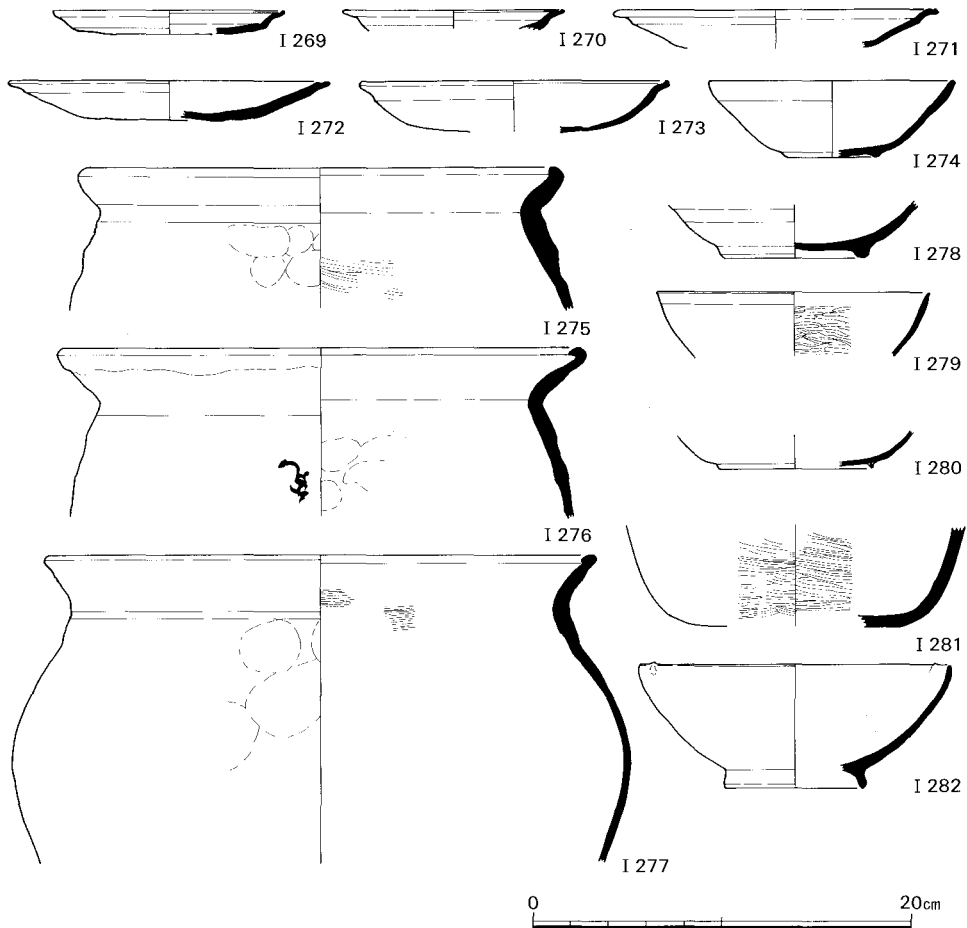


図17 SX3 出土遺物 (I 269～I 277土師器, I 278白色土器, I 279～I 281黒色土器, I 282灰釉陶器) 端部を I 263は内側上方, I 264は内側へ肥厚させている。I 265は黒色土器碗。内面のみに黒色処理するA類である。I 266・I 267は白色土器の碗ないしは皿の底部。I 268は灰釉陶器の短頸壺。このほか, SX 7からは須恵器, 鉄製品, 炭化材が出土している。

SX3 出土遺物 (I 269～I 282) I 269～I 274は土師器食器類。I 269・I 270は皿A, I 271～I 273は碗Aないし杯A, I 274は碗Bである。いずれも整形は, e手法である。I 274は退化した高台がつく。I 275～I 277は土師器甕。口縁内外面を横撫でし, 端部を内側に折り曲げて, 口縁部を作る。胴部は, わずかに残る痕跡から判断して, 叩きによって成形した後, 刷毛目調整あるいは指押さえによって仕上げている。I 276は胴部外面に墨書があり, 天地逆転しているを見ると, 「瓮」と判読できる。I 278は白色土器碗。回転



出土遺物

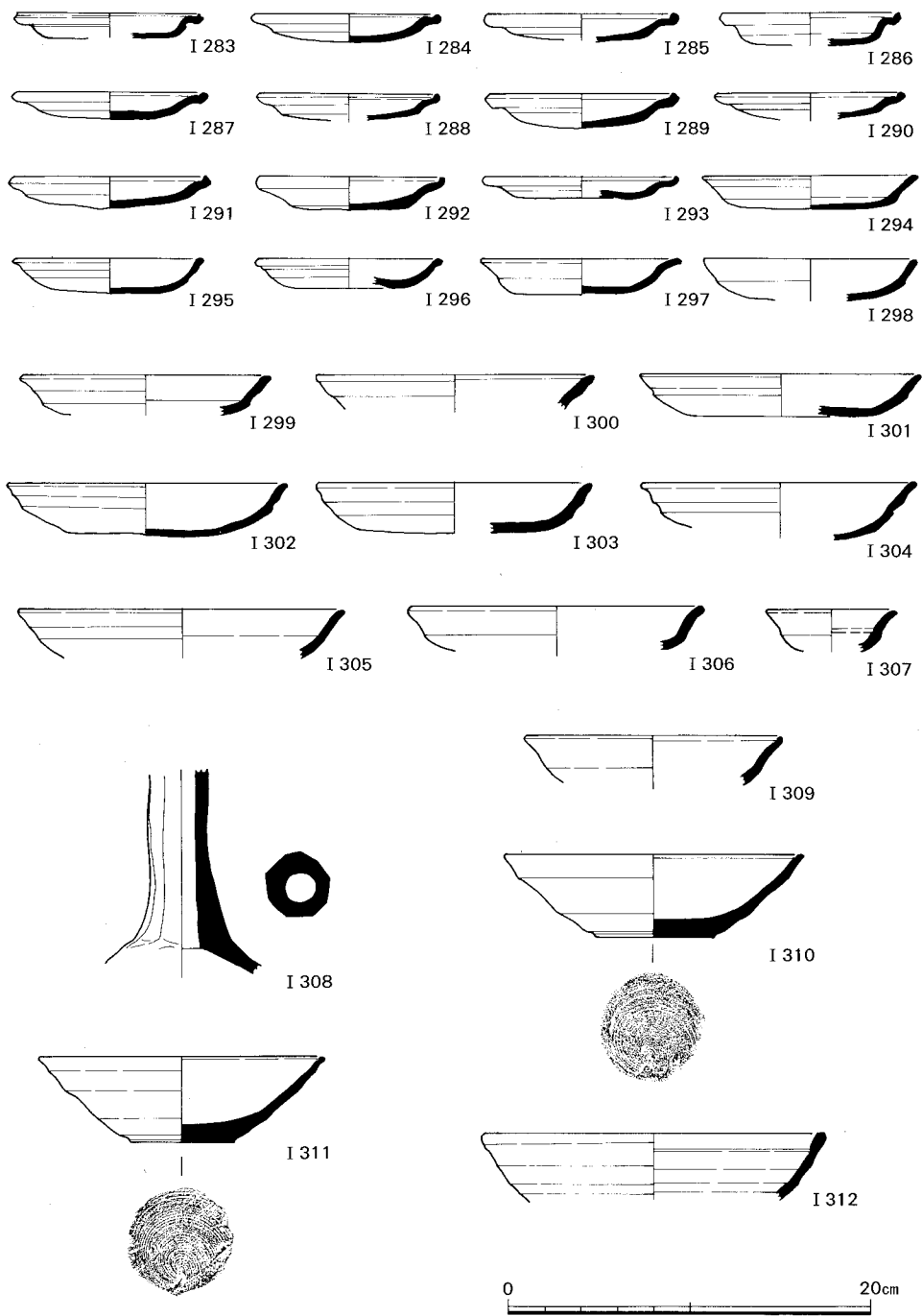


図18 SK83 出土遺物 (I 283~ I 307土師器, I 308~ I 312白色土器)

台を用いて成形しており、削り出し高台がつく。内面は横撫で、外面は粗い磨きで仕上げている。I 279～I 281は黒色土器。I 279・I 280は椀、I 281は鉢。いずれも内面を黒色処理するA類。I 282は灰釉陶器椀。口縁の一部を内側にくぼませた輪花椀で、高台は「三日月高台」である。

SX7・SX3 出土遺物は、土師器の法量の分化が不明瞭になっているなど、SD45 出土遺物よりも若干新しい様相をもっている。10世紀前半ごろのものであろう。

**SK83 出土遺物 (I 283～I 312)** I 283～I 307は、土師器食器類。I 283～I 306は皿A。橙褐色の色調のものが多く、黄白色のものが少量ある。口径は、11cm にピークがある皿AⅡ (I 283～I 299) と15cm にピークがある皿AⅠ (I 300～I 306) に法量の分化がみとめられるけれども、量的には8割近くを皿AⅡが占めている。仕上げは基本的にe手法で、I 286・I 298は見込みに刷毛目調整の痕跡を残している。またI 286は口縁端部に煤が付着している。口縁部の形態は、I 283～I 293が「て」字状口縁手法で、I 283～I 288がB<sub>3</sub>類、I 289～I 293がB<sub>4</sub>類、I 294～I 297・I 300～I 305が2段撫で手法で、I 294・I 295がC<sub>1</sub>類、I 296・I 299～I 305がC<sub>2</sub>類、I 297～I 299・I 306が1段撫で手法D<sub>1</sub>類である。「て」字状口縁手法B<sub>3</sub>・B<sub>4</sub>類は、皿AⅡにのみみられる一方、2段撫で手法C<sub>2</sub>類は皿AⅡにもみられるが、基本的には皿AⅠの手法であることがみてとれる。I 307は、口径7.2cmをはかる小型の椀。

I 308～I 312は白色土器で、I 308は高杯の軸部、I 309～I 312は椀である。椀は、回転台を用いた横撫でによって成形し底部には糸切りの痕跡を残している。

SK83 出土遺物は、平安中期、11世紀中頃のものであろう。

以上、記述してきた遺構出土以外にも、茶褐色砂質土や中世の遺構である砂取穴などから、古代の遺物が多数出土している。これらの内訳は、土師器、黒色土器、国産陶器、貿易陶磁などである。貿易陶磁は、越州窯系青磁や邢窯系白磁の小片が確認できている。以下、緑釉陶器についてのみ、実測図を掲げて解説しておく(図19)。

I 313～I 327は、底部を削り出して成形する京都産緑釉陶器で、I 313～I 326は椀・皿、I 327は托である。I 313～I 321は、底部が円盤状高台となり、釉は淡緑色で全面にかかる。I 316が硬質であるほかはすべて軟質である。I 322～I 324は、底部が蛇の目高台となるもの。I 322は軟質で、高台の段は浅い。I 323・I 324は硬質で、I 323の見込みには、籠状工具で「X」が陰刻されている。I 325～I 327は、底部が輪高台となるもの。いずれも硬質で、I 326は体部中位で屈曲し稜をもつタイプで、底部外面を露胎とする。I 327は、

出土遺物

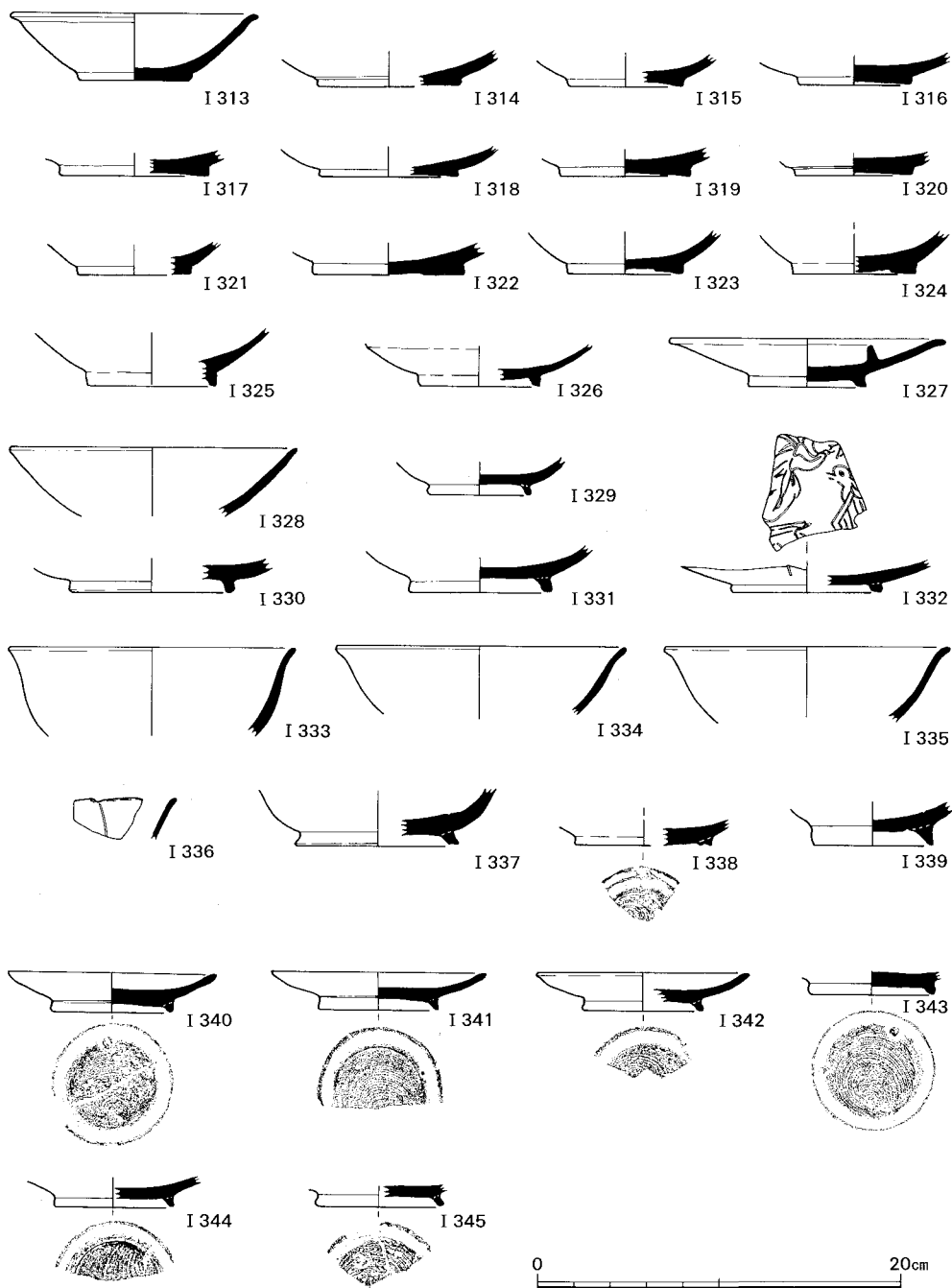


図19 緑釉陶器 (I 313~ I 345)

皿形の内面に受け部がつく托である。底部及び受け部は完存するものの、口縁部の残存は約4分の1である。残存部内面の割れ面に沈線の痕跡が認められるので、口縁部内面に陰刻による文様を描いていたと思われる。I 313～I 322は9世紀前半、I 323～I 325・I 327は9世紀後半、I 326は10世紀前半のものであろう。

I 328～I 332は、東海産の椀・皿で、高台は貼り付けにより作る。いずれも硬質である。I 332は、見込みに花鳥文を陰刻で描き、内面に粘土帯を貼り付け、対応する外面に篋描きの沈線を施している。9世紀後半。

I 333～I 339は、近江産の椀・皿で、高台は貼り付けにより作る。I 337が硬質な焼成であるほかはすべて軟質で、濃緑色の釉がかかる。I 336は輪花椀である。I 338は底部外面に糸切痕が残る。I 339は見込みに圈線がめぐる。I 338・I 339は、底部外面露胎である。10世紀後半を中心とする時期のもので、三角高台のI 339は11世紀に下るものであろう。

I 340～I 345は近江産あるいは防長産かと思われる皿類で、貼り付け高台である。口径12cm前後、底径は6.6～6.8cmで、規格性が高い。近江産と判断できるI 333～I 339と比較

表3 遺構出土の土器・陶磁器の種類別比率

[SX8]		[SK83]	
土師器	皿・椀・杯	土師器	皿
	6.5個体 (65.0%)	白色土器	椀
	高杯		高杯
	0.1個体 (1.0%)		*
	壺・甕	須恵器	甕・鉢
	1.3個体 (13.0%)	緑釉陶器	皿・椀
黒色土器	椀	灰釉陶器	皿・椀
	*		*
須恵器	杯・杯蓋	総計	15.7個体 (100%)
	0.8個体 (8.0%)		
	壺・壺蓋		
	1個体 (10.0%)		
	甕		
	0.3個体 (3.0%)		
	総計		
	10個体 (100%)		
[SD45]		[SX7]	
土師器	皿・椀・杯	土師器	皿・椀・杯
	62.1個体 (65.9%)		7.3個体 (79.3%)
	高杯		高杯
	0.9個体 (1.0%)		0.3個体 (3.3%)
	鉢		甕
	0.2個体 (0.2%)	黒色土器	椀
	甕		鉢
	11.9個体 (12.6%)		*
黒色土器	椀	白色土器	椀
	2.7個体 (2.9%)		*
	鉢・甕	須恵器	椀・杯
	3.4個体 (3.7%)		壺
白色土器	椀・壺・盤		鉢・甕
	0.8個体 (0.8%)	緑釉陶器	皿・椀
須恵器	杯・杯蓋		灰釉陶器
	0.4個体 (0.4%)		皿・椀
	甕・鉢		壺
	0.6個体 (0.6%)		0.2個体 (2.2%)
緑釉陶器	皿・椀		総計
	3.7個体 (3.9%)		9.2個体 (100%)
	香炉		
	*		
灰釉陶器	皿・椀		
	7.0個体 (7.5%)		
	壺		
	0.4個体 (0.4%)		
白磁	椀		
	0.1個体 (0.1%)		
	総計		
	94.2個体 (100%)		

\*は数値としてはあらわれないもの

して、やや明るい緑色の釉が全面にかかり、底部外面は糸切痕を残している。底部内外面に三叉トチンの痕跡が観察できる。10世紀代のものであろう。

(3) 瓦 類 (図版11, 図20・21)

平安時代の瓦類が整理箱25箱出土した。ここでは、軒瓦について報告しておきたい。瓦当文様の同定の困難な細片も加えて、軒丸瓦16点、軒平瓦34点である。

**軒丸瓦 (I 346~ I 351)** I 346~ I 349は平安前期。I 346・ I 347の瓦当文様は複弁八葉蓮華文。I 346は2条の界線で、内区と外区を分ける。大極殿出土例や西賀茂角社西群瓦窯出土例と同範 (平安博物館『平安京古瓦図録』の36・37番, 以下, 平古36・37番のように略記する)。I 347は外区を欠失する。中心の蓮子は1+8で構成する。西賀茂瓦窯NS152Dと同範 [近藤編78, 図版86]。I 346はSF2, I 347は西砂取穴出土。I 348は小破片で、全体の構成が伺いにくい。西賀茂角社東群瓦窯出土例 (平古59番)と同範の可能性

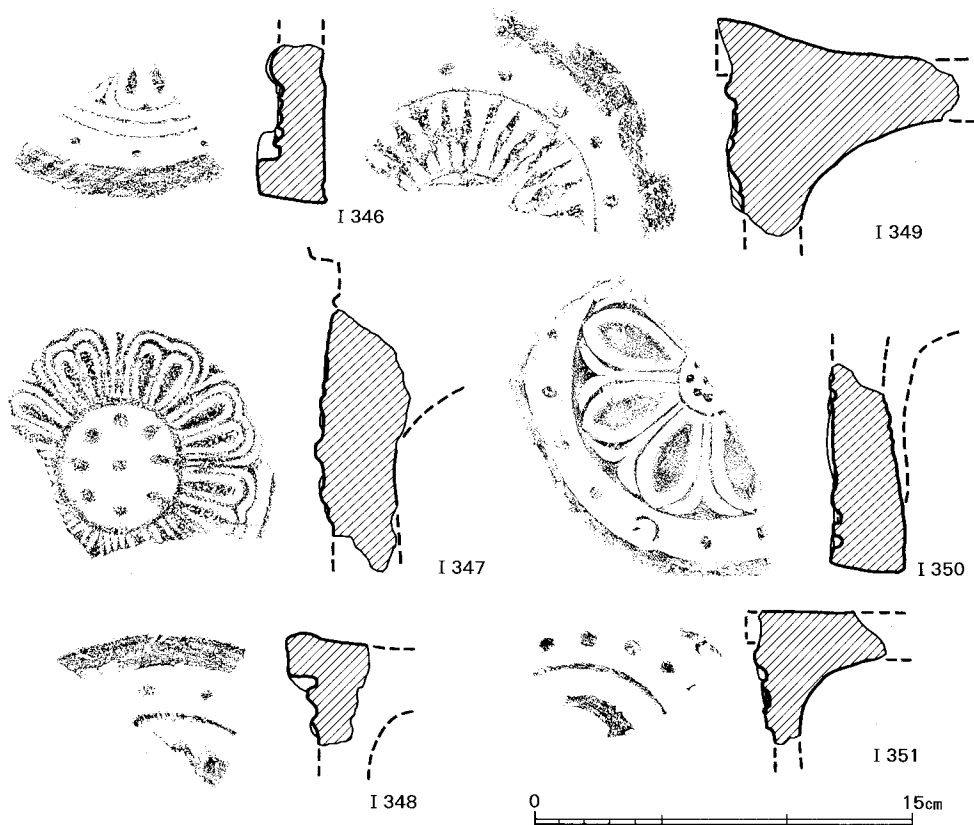


図20 軒丸瓦 (I 346~ I 351) 縮尺1/3

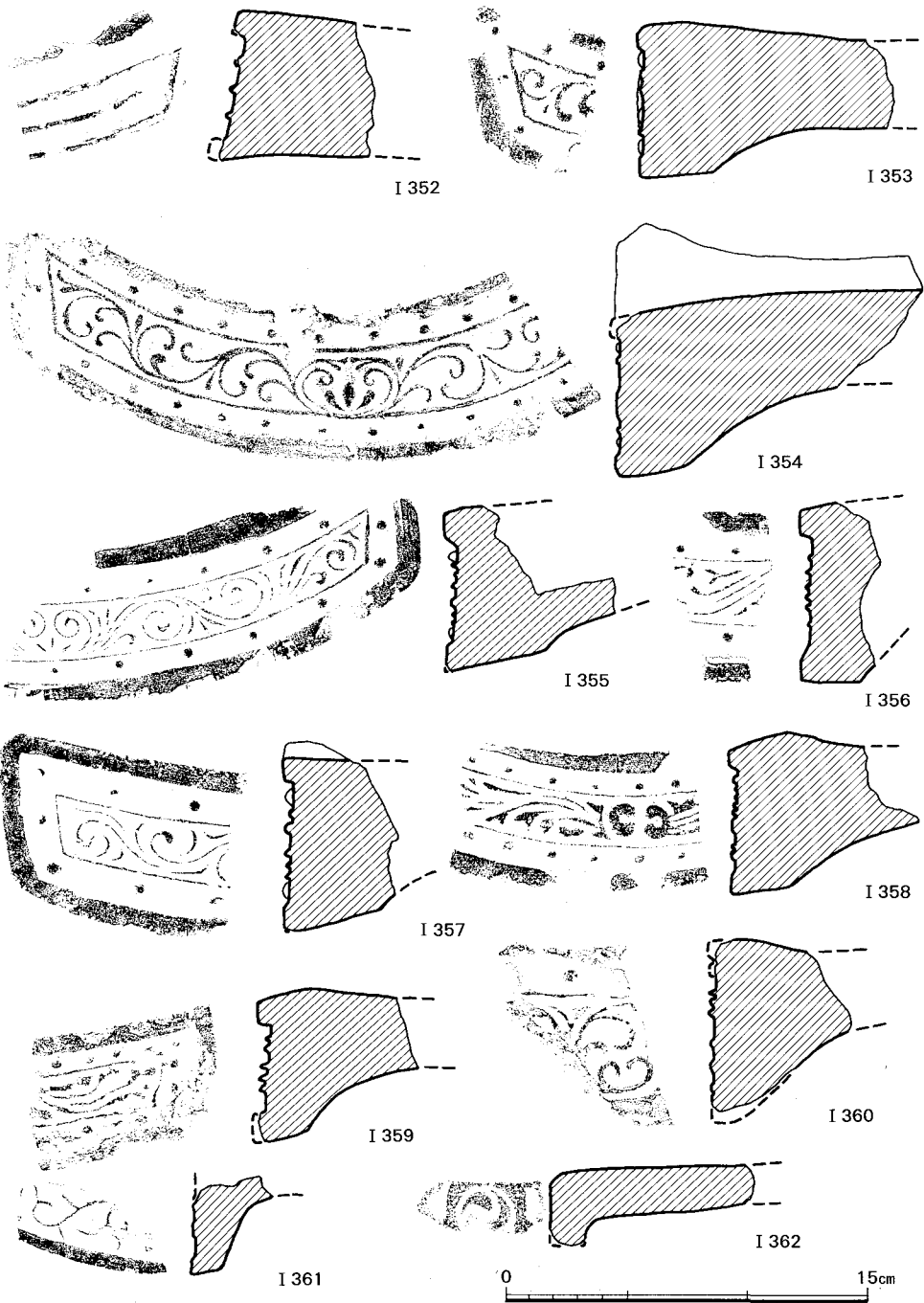


図21 軒平瓦 (I 352~ I 362) 縮尺1/3

## 出土遺物

が高い、蓮華文軒丸瓦とみられる。東砂取穴出土。I 349は瓦当文様の崩れが著しいが、複弁十葉蓮華文とみられる。采女町出土例と同範（平古45番）。赤褐色土1出土。

I 350は平安中期の「小乃」銘単弁八葉蓮華文軒丸瓦。瓦当は約1/2の残存で、「小」は欠失する。同範例が北部構内農学部総合館周辺の発掘調査で1点出土している〔中村73〕。

I 351は平安後期の瓦で、瓦当文様は巴文で構成される。

軒平瓦（I 352～I 362） I 352は奈良型式の重郭文軒平瓦。重郭内にさらに1条の突線を表出する難波宮6574型式である。同範例がもう1点あり、ともに東砂取穴より出土している。

I 353～I 357は平安前期の瓦で、瓦当の文様はいずれも均整唐草文である。I 353は、凸面は篋削りで整形し、凹面には布目圧痕を残す。西加茂角社西群瓦窯跡出土例と同範であろう（平古320番）。近世の溝出土。I 354は凸面を篋削りし凹面は布目圧痕を撫で消している。中心飾りに「小」形をおき、先端が「Y」形になった枝葉が取り囲んでいる。左右3反転する流麗な唐草文を配する。同範例が北部構内BD32区の立合調査で1点出土している〔京大埋文研80, p.6〕。西加茂瓦窯NS202A型式で、岸辺瓦窯から西加茂角社瓦窯へ範が移動しつつ生産された製品である〔近藤編78〕。SD45出土。I 355はSX9土で、SX1とSX6より、同範例が各1点出土している。中心飾りに「小」形をおき、逆「6」字文が取り囲む。左右3反転する唐草文を配し、端部に三叉文を加えている。I 356は小片で全体の構成を判断しにくい、大極殿跡出土例と同文とみられる（平古369番）。I 357は、I 355とともに芝本瓦窯の製品〔上原94〕である。茶褐色砂質土出土で、同範例がSX8から2点、茶褐色砂質土、赤褐色土2から各1点出土している。

I 358～I 360は平安中期の瓦である。I 358とI 359は同範で、中心飾りに対向する「C」字文をおき左右に均整唐草文を配する。平瓦凸面は削り整形し、凹面には布目圧痕を残す。I 358は東砂取穴、I 359は西砂取穴出土で、これ以外に東西の砂取穴から各1点ずつ同範例が出土。北部構内農学部総合館周辺の発掘調査で同範例が3点出土している〔中村73〕。I 360は小片で瓦当文様の構成がわかりにくい、朝堂院跡出土例（平古413番）と同系統の均整唐草文となろう。SX83出土。

I 361・I 362は平安後期の瓦。I 361は繊細な唐草文を配する。瓦当左側面は生きている。赤褐色土2出土。栗栖野瓦窯出土例と同範〔京都市埋文研96, 図版11-89番〕。I 362は中心飾りに巴文をおき、左右に剣頭文を配する。折り曲げ作りで、平瓦凸面から瓦当裏面へ連続する布目圧痕が残る。灰色土2出土。

## 5 小 結

**縄文時代の遺跡** 本調査区が含まれる北白川追分町縄文遺跡は、これまでの調査において調査地点により、遺構や遺物の種類・時期などが明らかになりつつある。123地点の中期の竪穴住居跡、11地点で検出された後期の甕棺墓や配石遺構、16・180地点の晩期の集石墓や土坑、56・135地点の晩期の埋没林などである。これに対して、今回の調査では縄文時代の遺物包含層が存在したにもかかわらず、遺構は見つからず、縄文土器の細片を中心に約400点の遺物を採集したにとどまった。

図22は、縄文時代の地形を反映していると思われる弥生前期の地形に、従来の調査における縄文時代、弥生時代の主な遺構・遺物の検出地点を重ね合わせたものである。縄文時代の遺跡の中心は、本調査区の西方ないしは南方にあって、本調査区付近は周辺部にあ

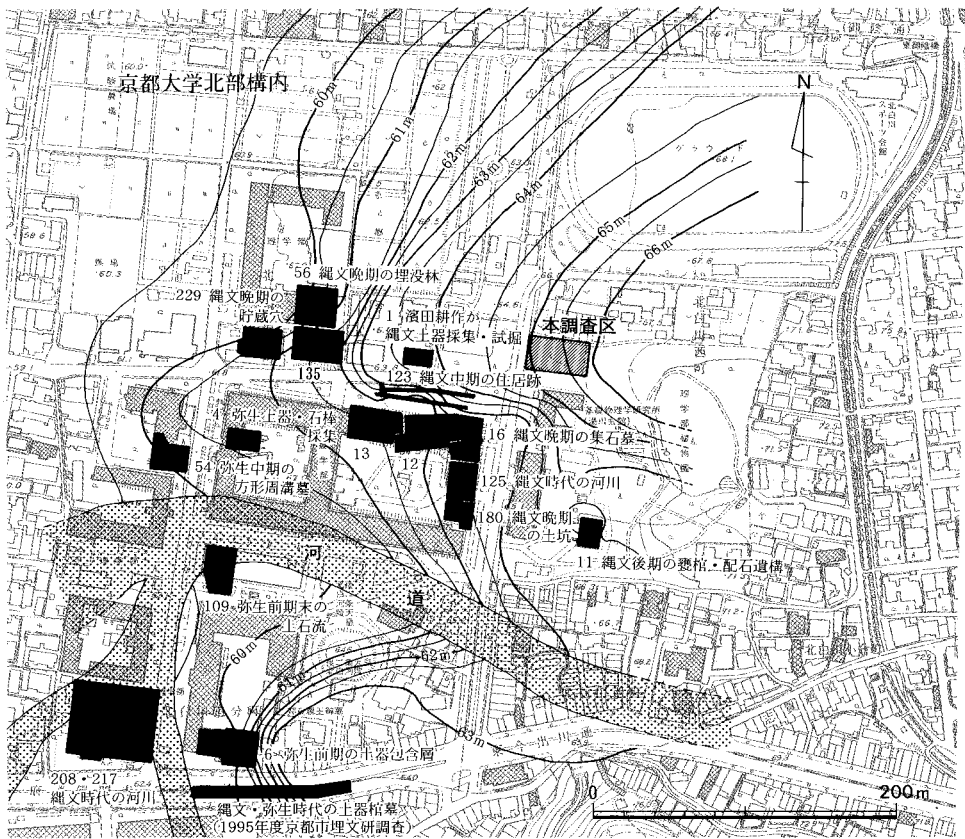


図22 調査区周辺の縄文・弥生時代の主な調査地点と弥生前期の地形 縮尺1/5000



ることが理解できる。北白川追分町縄文遺跡の広がりや当時の景観を復元するうえで、ひとつの手がかりにすることができよう。

遺物に関しては、早期の押型文土器が注目される。押型文土器は6点出土しており、いずれも前半期の大川式～神宮寺式に位置付けられるものである〔矢野93〕。後半期の押型文土器は、京都大学の位置する比叡山西南麓一帯で複数の遺跡から出土しており、北白川上終町遺跡ではこの時期の住居跡も検出されている〔網94〕。しかし前半期の押型文土器は、京都盆地全体を対象にしても盆地中央部の西ノ京南上合町遺跡で1点確認されていただけであって〔京都市83〕、今回得られた押型文土器は、これとともに盆地最古の縄文土器である。本部構内A U30区で見つかった有茎尖頭器も前半期の押型文土器にともなう可能性があり〔千葉ほか97〕、今後周辺地域の調査のさいには、この時期の遺跡についても十分留意する必要があると考える。

**古代の遺跡** 今回の発掘調査の結果として特筆すべきことは、平安時代前期から中期の溝、土坑、土器溜や多量の遺物が発見されたことである。このうち11世紀前葉の土坑群を除くと、遺構からは土器・陶磁器のほか炭化材や瓦片なども出土しており、不用になった器物の廃棄を示していると理解できる。それぞれの遺構出土の遺物についてはすでに詳述したので繰り返さないが、年代的には9世紀前半から10世紀前葉にかけての時期に活動のピークをみてとることができる。遺構としては、溝が建物跡に関連する可能性をもっているものの、建物跡を直接示すような遺構は見つかっていない。ただし平安前期・中期の瓦類がみつまっているので、付近に瓦葺きの建物が存在した可能性は高いと考える。

京都大学吉田キャンパスにおける発掘調査では、平安時代のうちでも前期の資料は乏しい状況にある。そうした中で、北部構内では平安前期から中期にかけての資料がたびたび報告されてきた〔中村73、泉ほか77、浜崎・千葉90、浜崎ほか95〕。とくに瓦類をともなうような遺物の出土状況から、平安時代の遺跡の中心は北部構内の東半部にあったと想定されており、今回の状況もそれを補強する結果となったといえる。

さて、北部構内におけるこうした平安時代の考古資料に関連してしばしば指摘されてきたものに、吉田寺や吉田卒塔婆供養所がある。吉田寺は、神楽岡吉田寺と中山吉田寺の2寺が存在したとされ、神楽岡吉田寺が北部構内の地に比定されている〔杉山54〕。『日本記略』貞元2（977）年4月21日条には、天台座主良源が神楽岡吉田寺で舍利会をおこなったという記事が見られ、また『天台座主記』の良源伝貞元2年4月7日条には、舍利会のために重閣講堂結構数字雑舎を建立したと記している。また、吉田卒塔婆供養所は、『小

右記』永祚元（989）年9月26日条に「吉田卒塔婆供養所」で卒塔婆を造立し供養したと見え、『権記』長保3（1001）年6月20日条には、「吉田北三丁内有葬送之処」とあり、北部構内にその場所があてられている〔杉山54・川上77〕。

こうした文献記事から、10世紀後半から11世紀にかけて北部構内の地に神楽岡吉田寺と称す寺院が存在し、それに付属するとみられる葬地があったことが知られる。BE29区で発見された平安末～鎌倉初頭の火葬塚は、文献記事より、やや新しい年代のものであるけれども、こうした記事に関連する考古資料といえよう〔岡田・吉野79〕。

今回みつかった平安時代の資料のうち、11世紀前葉ごろの土坑群は、墓壙とみることであれば、「葬送之処」を示す資料と考えることもできる。一方、資料の中心をなすのは、9世紀から10世紀前葉のものであり、これらは上述の文献記事とは100年近い年代のズレがみられ、直接的な関連を探るのはやや困難である。

この点に関連して、貞元2年の舍利会を神楽岡吉田寺の創建を示すとみる必要はないとする解釈に注目したい。『日本紀略』によると、貞元元年6月に、円覚寺という寺院が地震で倒壊しており、その翌年におこなわれた神楽岡吉田寺の舍利会は、円覚寺の再建を示すのではないかという解釈である〔岡田80〕。

円覚寺は、『日本三代実録』元慶5（881）年3月13日の条に、落飾した清和太上天皇（850-880）によって創建されたという記事が見られる定額寺である。元慶4年12月4日の条には同寺で、清和太上天皇が崩御したと記されている。その前身は、右大臣藤原基経（836-891）の別業「山庄」（粟田院）である。

円覚寺の所在地については、『日本三代実録』元慶3年5月4日の条に、円覚寺の前身である「山庄」が鴨川の東に所在するという記載がみられ、また『保元物語』（日本古典文学大系）の新院・左大臣殿落ち給ふ事では、官軍が「北白河円覚寺」の方へ向かったという記述がある<sup>4)</sup>。また『山城名勝志』巻第13では、所在地として北白河と岡崎（「鳥居小路西2條末南田」）の2説を示し、『京都坊日誌』では後者を採用して、法勝寺の西方、岡崎の地に円覚寺を比定している。

こうした文献を検討した杉山信三は、保元の乱（1156年）のさいにも円覚寺は存続しており、六勝寺との位置関係からみて、岡崎に比定することは困難とし、北白川の地に円覚寺を比定している〔杉山55〕。戦場となった岡崎から、「北白河円覚寺」の方へ向かったという上に示した『保元物語』の一文が史実を反映しているとすれば、北白川に円覚寺を比定するのが納得のゆく解釈であると思われる。ただし、この場合にも、円覚寺と神楽岡吉田

## 小 結

寺を同一の寺院とみてよいのか、あるいは北白川のどの地点に円覚寺を比定するのか、それらを明らかにできる材料を得てはいない。こうした課題を今後に残すものの、今回見つかった平安前期～中期の遺構や遺物は、その質や量、存続時期などを勘案すると、文献上にみえる藤原基経の別業「山庄」あるいはそれから発展した円覚寺に関連するものとみる見方が有力であると考えておきたい。

こうした想定を傍証するかもしれない資料が溝 SD45 から出土した一括遺物である。これは、9世紀後半に編年される資料であり、緑釉陶器・灰釉陶器の優品や白色土器三足盤といった特殊な器種を含んでいる。また緑釉陶器のほとんどが東海産で占められている点も注目し得る。平安京城の遺跡では、京都産の緑釉陶器が主体を占めている時期であり、東海産の製品が目立つのは、天皇関連の邸宅や離宮であるからである〔堀内94〕。SD45 出土の一括資料は、平安京近郊の出土例として異例なものであるけれども、こうした遺物が、清和太上天皇の菩提寺となった円覚寺に関連するのであるならば、けっして不自然なものではないのであろう。

**中世以降の土地利用** 平安時代において、寺院あるいは貴族の別業などといった上流階層に関連する空間を形成していた本調査区一帯は、12世紀以降大きく変貌を遂げたようである。白色砂を対象とした土の採取跡が調査区中央部と西辺部の二ヶ所で検出された。本調査区の西に隣接する BF33 区や西南方約50mの BE33 区でも、白色砂や粘土を対象とした採取跡が確認されており〔泉ほか77, 清水84, 泉・三宅86〕、中世前半（12～13世紀）には、この地一帯が土取りという生産活動の場となっていたことがわかる。また、今回検出された二ヶ所の土の採取跡のあいだには、南北方向に伸びる採取の及ばない空閑地が認められた。中世後半には、この地点には道路が造成されており、すでに中世前半において、土地境界などの役割をもっていたことを考えてよいのかもしれない。

中世後半以降には、調査区西辺を南北方向に伸びる道路 SF1・SF2 が造成された。SF2 は14世紀後半にさかのぼり、SF1 に大半を削平されているが、数枚の路面を確認できることから、長期に及ぶ利用が想定できる。SF1 は逆台形に地面を掘削した幅約4mの道路で、16世紀以降の利用が考えられる。道路の東側では、16～17世紀の耕作土と畝溝が検出されており、本調査区の南西に位置する BE33 区でもこの時期の水田が認められている〔泉・三宅86〕。中世後半以降近世においては、南北方向にはしる道路の両側に、農作地がひろがるという景観を想定することができよう。

さて、江戸時代に作成された絵図のなかで、中井家旧蔵「洛中洛外絵図」天明6（1786）

年改（京都大学附属図書館蔵）などには、白川道と今出川通のほぼ交叉する地点から田畑の間を縫って北方の田中村へと通じる道が描かれている。位置関係からみて、今回検出した道路はこれに相当するものと考えられる。この道は、京都大学が北部構内を買収した大正11（1922）年頃に作成された地籍図にも描かれていて、本調査区の西側を南北方向にはしる現在の大学構内の道路にその名残をとどめている。本調査区付近では、この道路が西の北白川追分町と東の北白川西町の字境界となっており、中世にさかのぼる地割りが現在にまで影響を及ぼしているさまを垣間見ることができるのである。

以上記してきたように、今回の調査では、平安時代の遺跡の性格に関して重要な知見を得ることができたほか、縄文時代から現代にいたる、この地一帯の土地利用の変遷を明らかにすることができたといえよう。

縄文早期の土器について、矢野健一氏より、古代の土器・陶磁器について、檜崎彰一・柴垣勇夫・小森俊寛・平尾政幸・高橋照彦の諸氏より、また古代の瓦類および文献について、上原真人氏より有益なる御教示を賜りました。末尾ながら記して、感謝いたします。

〔注〕

- (1) 金比羅宮所蔵本を底本とした『日本文学古典体系』31（岩波書店）による。同じ箇所は、内閣文庫蔵半井本では「為義ガ所領北白河縁学寺ノ方へ馳向」、また宮内庁書陵部蔵古活字本では「判官の領円覚寺へ発向する由」と記されている。なお、円覚寺は保元の乱の頃には、源為義の所領となっており、為義の菩提寺となったことが同物語からわかる。